

正・政・清・聖・性・醒

炉ばたセイ談



令和5年秋号

いたずらに月日は流れ、今年九月に誕生日がくると私は92歳になる。むかし、私の父、母の時代だと大抵60代あるいは、長生きして70代で亡くなっている。今や、人生100歳の時代なのか。

むかしと今は、時間の観念がちがっているのか。兎に角、皆、長生きしていぬ。

一日おきに行っているデイサービスには、100歳のじいさんが来ているが、見かけは70代くらいである。兎に角、ガンにさえならなければ、皆長生きするのだ。

結局、今や人生百歳の時代が到来している。ということとは、世界は至極平和なのだ。人類はもう、戦争にあきたのだ。本当にそうなのかどうかは、あと30年くらい経たないと分からない。

(重朝記)



目次

ああ夏が来た！ . . . . . 入来院重朝 . . . 1

入来薪能の復活を期待 . . . . . 中西 喜彦 . . . 2

「入来花水木会」 . . . . . 入来院久子 . . . 4

「テクノロジーと人間の尊厳」について . . . 十五代沈壽官 . . . 8

敬天愛人と『土中の死骨』 . . . . . 宮下 亮善 . . . 13

「そよ風通信」 . . . . . 入来院久子 . . . 21

鎌倉時代の裁判の仕組み . . . . . 溝口 敬人 . . . 22

海国日本 . . . . . 奥村 太 . . . 24

一周まわって縄文人 . . . . . 山本 洋子 . . . 27

酒池肉宴 . . . . . 串田 達治 . . . 31

「やんちゃ少年発掘記」 . . . . . 白男川孝仁 . . . 39

「うむ」を考える . . . . . 米森寿美男 . . . 45

これからの観光組織に求められるもの . . . 奈良迫英光 . . . 51

穂垂引き — 回想 入来の出来事 (2) . . . 中山とし子 . . . 58

追悼 渡辺京二 . . . . . 梶原 宣俊 . . . 64

日本の伝統芸能文化に魅かれて — 伝統文化教育について考える —  
 . . . 梶原 宣俊 . . . 66

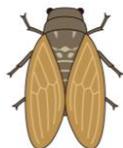
島津寒天工場跡 — 歴史を訪ねる旅 (17) . 下土橋 渡 . . . 79

固心院いくさ墓 — 入来麓史跡探訪 (1) . . . . . 89

編集後記 . . . . . 下土橋・入来院 . . . 90

ああ夏が来た！

入院 重朝



もうすぐ八月がやって来るといふ時に、今年はやっと梅雨が明けた。土用の丑の日曜日。朝から晴れ渡り、ああ夏が来た！と声に出してつぶやくのだ。気が付くと九十を過ぎ、来月になれば九十二歳となる。自分では歳を取ったという感じはほとんどなく、足腰は若い頃と比べれば多少弱くなったが、気分はまあまあである。このぶんでいくと百もあつという間かもしれないと思う。世間では長生きをしたと言われるほうになるだろう。

さて、長生きをしていいことがあつたか、これは何とも云えない。夫婦揃って健康であれば、これは申し分ない。しあわせそのもの

である。しかし、そんな夫婦はそう多くはない。私も妻が逝つてもう十二年になるということを思うと、自分でもそろそろという気持ちになる。しかし、どこか悪いところがあれば目安も付くが、どこもどうもないとなると、いいのか悪いのか、何とも云えない。この分ていくとあつという間に百歳になっているかもしれないのだ。

昔はガンになつて死ぬのが多かつた。今もそうかもしれない。なつたらなつたでこれは運命だから仕様がなない。何れみんな死んでいくのだから。それにしても、今もどこかで戦争をしている。人類は本当にイクサが好きだ。

(炉ばたセイ談庵主)



## 入来薪能の復活を期待

中西 喜彦



早いもので貞子さんが亡くなられて13回忌を迎えた。丁度本誌7号発行の時であった。平成23年4月に当時編集長をしておられた貞子さんから原稿依頼を頂いたが、5月2日におなくなりになるという悲しい出来事があった。重朝氏に発行の有無をお尋ねしたら「ぜひ続けましょう。貞子の供養にもなる」ということでした。そこで「貞子さんに誌上で再会」を旗じるしに現在に至っています。本誌の会長も桐野三郎氏、渋谷繁樹氏、さらに4年前からは筆者が変わっております。貞子さんは平成6年に東京から重朝氏の定年後の帰郷にさきだって入来に移住され

「入来花木会」を立ち上げて入来の文化振興に尽力されました。渋谷五族下向750年記念碑を設置、文化財「入来文書」の普及、「入来茅葺門」の紹介、もう一つの文化財である「清色城跡」を背景に薪能を開催されました。平成11年に第1回が催しされ、平成17年まで毎年開催され、その後4年の休会ののち、平成22年から再開されました。この年の3月に筆者がお訪ねして謡曲連合会会報「風姿」に入来薪能の紹介をお願いしたのが最初の貞子さんとの出会いでした。

上述の活動の中で能は貞子さんが最も力を入れられたものです。嬉しいことに貞子さんが立ち上げた入来花木会が長女久子氏の努力で再興され今年で三年目を迎える。貞子さんの意図は、日本と西洋の近代社会までの社会の成立を知るには鎌倉時代から入来はもつとも良い研究対象であるということ、入

来文書の紹介さらに清色城跡での薪能の開催  
を  
実行されました。現在の日本文化を室町時  
代に確立させた能を紹介することにより入来  
の文化力を示し、町の振興を図られました。

能は五つのジャンルに分けられ、日本のめ  
でたい話や武士の勇ましい戦いや色んな女性  
の話や当時の日本の社会の有様、旧所名跡の  
紹介などをしております。

その中の能「鳥追舟」は地元川内の話をも  
とに作られたものです。貞子さんはこの「鳥  
追舟」だけは薩摩川内市多目的広場で開催さ  
れました。さらに貞子さんの勧めにより史跡  
(鳥追の杜)近くの川内駅前「鳥追母子像」  
の銅像が記念として教育委員会によって設置  
されました。

また鹿児島県民交流センター(能舞台)が  
平成15年に建設されて今年で20年目とい  
う節目を迎えます。実は、筆者は貞子さんの

薪能の開催が県民交流センター能舞台設置の  
引金になったのではないかと思っています。  
薩摩藩は大藩といながら能舞台は一つもな  
いといううわさを当時聞いていました。

鹿児島謡曲連合会は今年70回大会を迎  
えます。一昨年鹿児島城御楼門復元を祝って  
宝生流皓月会(石黒実都師主宰)によって祝  
賀能「俊寛」が披露され、今年は謡曲連合会  
との共催で能「鳥追」が鹿児島県民交流セン  
ターで演じられます。入来薪能第4回「鳥追  
舟」が演じられてから21年に当ります。

入来花水木会では入来薪能の開催を目指  
して能舞台の整備をはじめとする諸準備を始  
めておられます。由緒ある当地での能楽観賞  
が歴史的な考察力、文化力の向上に資するこ  
とを期待するものです。

(鹿児島謡曲連合会会長、鹿児島大学名誉  
教授、炬ばたセイ談会会長)

## 「入来花水木会」



入来院 久子

の方々におんぶに抱っこでお世話になっている。それにしても鹿児島市内や霧島市からも行事の度に入来までお越しくださるメンバーがいてくださって、それを思うと尚更、感謝の気持ちが溢れてくる。

2021年に「入来花水木会」を再興して、今年で三年目に突入した。本年度からは薩摩川内市から活動助成金もいただけ、事務局を中心に張り切って活動しているつもりだが、如何せん「入来麓」に移り住んで私はまだ五年しか経っていないし、そもそも鹿児島で暮らすことすら初めてで、尚且つ車の運転が苦手で地図も読めない私は、鹿児島県全体の地理や何号線といった道路の名前すら未だに頭に入っていない。なので、自分からは鹿児島市内まで、なかなか出かけられないで引き籠っている状態で、様々なことで事務局や会員

「入来花水木会」主催で昨年から開催している「入来麓たのしいまち歩き」には県の景観アドバイザーである石田尾博夫先生の協力の下、鹿児島大学、第一工科大学、鹿児島女子短期大学の各教授の方々がそれぞれ学生たちに声をかけてくださり、遠方からまち歩きにご参加してくださっている。一般参加者は新聞の広報欄を読んでご参加くださる高齢の方が多いのだが、大学生が大勢参加してくださることで、老若男女が参加する賑やかな、名目通りの「たのしいまち歩き」となりとても嬉しい。

この「入来麓たのしいまち歩き」は若手の

会員2名に入来麓の観光案内所で貸し出して  
いる甲冑（足軽・武者）を着ていただいて参  
加者をオモテナシしているのだが、そのうち  
一人が霧島市在住の会員で、彼は今年も早起  
きをして入来麓まで来てくださり、甲冑を身  
に着けて参加者と共に5月下旬の暑い中、ま  
ち歩きをしてくださった。頭が下がる。それ  
でも、特に学生たちは甲冑が珍しいので自分  
も着てみたいと思うらしく好評なので、申し  
訳ないがこの企画は今後も続くと思われる。  
どうか2人の会員には体力維持に励んでいた  
だきたいと思う、ある意味酷い会長である私。  
それでも昨年は秋に開催し、今年は春に開催  
となった「入来麓たのしいまち歩き」は、毎  
回定員の四十名を大幅に上回る人気イベン  
トなので続けていくべきだと考える。

そして、今年2023年はなんといつても  
「入来文書」を世界に発表してくださった朝

河貫一博士の生誕150周年という記念すべ  
き年である。昨年も東京から「入来文書」の  
翻訳本の著者である矢吹晋先生をお呼びして、  
入来花水木会と入来郷土歴史研究会の会員や  
「入来文書」に関心がある薩摩川内市の方々  
に質疑応答形式の講習会を小規模で開催した  
のだが、朝河貫一博士の生誕150年に当た  
る本年は大ホールで大勢の方々に聴講してい  
ただきたいと切に願っている。特に入来麓に  
暮らす住民には是非聴講してほしいと願う。地  
元住民こそ「入来文書」が何たるかを正しく  
理解していただきたいと思うのだ。そうすれ  
ば、この伝統ある入来麓がどれだけ日本に、  
いや世界に誇れる素晴らしい土地であるかが  
分かるはずだから。それを知ることによって自分の  
住む町を心から愛する気持ちが生まれれば、  
過疎化も防げる気がするからだ。

“灯台下暗し”と言うように、当たり前

ように古い石垣の風景の中で生活し、城跡のお堀や古い石階段が残る場所にある小学校に通いながらも、かつてこの麓で薩摩武士がどのように生きていたのかということはあまり関心もなく過ごしている気がするので、まず親から率先して学び、その姿を子や孫に伝えて行つて欲しいと祈るのだ。

「疱瘡踊り」や「神舞」など、入来に伝わる無形民俗文化財などは私もこれから関心を持つて学び、伝統の灯が消えることのないようなお手伝いができたらと思う。そして、そのため「入来花水木会」はこの入来の地で地道に活動していきたい。

そして最後に特筆すべきことがある。亡き母が「入来花水木会」で主催していた「入来薪能」の復活なのだが、薪能の檜舞台の点検をお願いしたのが昨年だったのだが、本年度は市からの助成金で修理をお願いしていると

ころだが、如何せん物資の高騰で市に提示していた予算では、とうてい賄えない事態となつてしまつて困つている。仕方が無いので、予算内で直せる箇所だけ直していただき、残りは来年に持ち越しの修理となるのだが、現在鹿児島県謡曲協会会長で「入来花水木会」の副会長である中西喜彦先生が宝生流の石黒実都先生をご紹介してくださるとのこと、秋に一度我が家の倉庫に眠る檜舞台と薪能会場となる清色城跡の入来小学校の校庭を石黒実都先生が見学にいらつしやる。しかも、今年宝生流が鹿児島県の能舞台（かごしま県民交流センター）で披露する演目が薩摩川内市ゆかりの「鳥追」なのである。このご縁を生かさないと手はない。

母が第4回「入来薪能」として薩摩川内市総合運動公園多目的広場で「観世流」の「鳥追舟」を公演したのは平成14年だから、

かれこれ21年も前のことになる。当時は鹿児島県にまだ能舞台が無かった時代だ。私は能の世界もまだまだ勉強不足で何もわかっていないのだが、能の源流は奈良時代からといわれ、鎌倉中期になると寺社公認のもと「座」の体制が生まれたという。戦国時代は武士に愛され、織田信長、豊臣秀吉にいたっては熱狂的に愛好していたという能。

特に野外で薪に照らされ演じられる能舞台は幻想的でこの世とはかけ離れた世界を見せてくれる。しかも薩摩の武士もかつては能舞台を堪能していたかもしれない・・・そんな風に思うと、やはり母が残した貴重な檜舞台は大切にし、これからもまだ役目を果たして欲しいと願うのだ。

色々欲張って、出来ることは何でもしたいと気ばかり焦るのだが、とにかく出来ることから少しずつ、この入来籠の為に、そしてそ



れは薩摩川内市や鹿児島県の為に繋がる活動だと信じて疑わないので、頼もしい素晴らしい仲間と共に、未来に向かって元気よく船を漕ぎたいと思っている。

(入来花水木会会長)

第6回入来薪能・薩摩守「忠度」(2005年8月27日)

## 「テクノロジーと

## 人間の尊厳」について



十五代 沈 壽官

のスキルの賞味期限です。従来求められてきた、正確無比な計算力、全体を掴む分析力、精緻に報告したり、概要をまとめる文章力、外国語を駆使する力がAIに取って変わられる不安です。

産業革命時に多くのブルーカラーが失職したように、今度は大量のホワイトカラーが失職するのではないかと。

一つで、文章を書いたり、要約したり、絵や音楽や映像条件などの創造的作業を「瞬時」にこなします。

これまでの「検索」と違うのはLIMと呼ばれる自然な言語によって、あたかも人と対話しているかの様に完成される点です。

「擬人性」の面白さは、同時に、人間ならではの領域にAIが入り込んでくるのでは？という不安を引き起こしつつあります。多くのホワイトカラーを不安にさせたのは、自ら

漠然とした不安はやがて恐怖に変わり、失職だけにとどまらず、簡単な言語で依頼すれば素人でも成果物を生成出来る事から、サイバーセキュリティ、ゲノム編集、軍事安全保障などの領域で問題が起こるのではないかと恐れ始めているのです。

悪意を持ってAIを使えば、精巧なフェイクニュースも生成可能で、技術の怖さを知らずに「刃物」が人間の存続を脅かすかも知れません。

倫理や法理の整頓がなされないまま高速で進化するAIが制御不能となる危険は、世界中で指摘されています。

しかし、一方AIが精度の高い仕事をするのは、人間が的確な指令を与えたからに他ならず、人々は「自分だけの助っ人」を得たとも言えます。微細化された半導体は血管の中に楽に入り込み様々なデータを収集し、画像で送ります。膨大な症例から最適な治療法を瞬時に見つけ出すAIは医師の有能な助手となろうし、地球温暖化の様な大規模解析が必要な科学者にとつても有益です。

「AIはドラえもんか？それともターミネーターか？」と悩む所がここなのです。

もしも、AIがドラえもんであるなら、

我々はAIを活用し、仕事を肩代わりさせる代わりに、自らの趣味や或いは別の仕事に就く事で人手不足を解決できるかも知れません。しかし、そこにも問題があります。例えばタクシーやバスを全て自動運転の無人車に変えたとしても、想定外の事が発生し、人命が失われたとするならば、その責任は誰にあるのか？それぞれのケースに於いて過失責任のレベルと、責任者が決められるべきで、そうすると車メーカーは当然及び腰になるでしょう。

又、将来的に更に高度化した超微細半導体が脳内に入り、その仕組みを学習したら、やがて人間以上の知能を持つことは想定内であります。何せ彼らは24時間、365日学習し続け、更にそこに量子コンピュータが加わるのです。これがターミネーター化への恐れであり、そうなれば、もはや無敵と言っても

良いかも知れません。

そこに人間の尊厳はどの様に関わって行くのでしょうか。

テクノロジの語源はアリストテレスの「テクネー」（手助け）です。したがって、人の尊厳とは、拒否出来ることであり、自己決定権があるという事であります。尊厳を護るという事は当然AIに支配されないという事なのでしよう。

現在中国では赤信号を渡ると、目の前の電光掲示板にその人の名前が瞬時に示されます。全ての国民は顔認証されていてプライバシーは一切ありません。

専制國家にとってのテクノロジーは支配者の「手助け」となっているのです。

この場合、支配者から見たらAIはドラえもんであり、国民から見たらターミネーターとなります。

この様な社会に人間の尊厳があるのでしようか？

事実、人間の尊厳には様々あります。

例えばアフガニスタンの様な戦地やアフリカの砂漠地帯に生まれた人々は貧困です。しかし、これは彼等の責任ではありません。彼等に対し、我々は単にラッキーだったただけだと言わざるを得ません。

つまり、富裕層は貧困層に借りがあり、そのこと如何に連携するかが、大切なのです。

しかし、現実社会では、裕福な人が貧しい人を利用して、能力のある人が持たない人を利用して利益を得ています。金融資本主義、株式至上主義、国家至上主義というグローバル

経済がひたすらに自己の利益のみを貪欲に追求し過ぎてきたのです。

そこに全ての人の等しい尊厳が存在するのでしょうか？

北朝鮮の貧しい家庭に生まれた子供と金正恩氏が同等の尊厳を持つ事はあり得ません。

しかし今や世界では様々な分野で2千兆円を超えるSDGsへの取り組みが行われていると聞きます。

それらは、大きく捉えると地球の為の倫理的善行であり、人類が共通の理性を持つときさる啓蒙思想に基づいていると考えます。

地球環境を改善し、同時に自社の永続性を高める為に、富の分配を倫理的価値観によって行い、それを会社の繁栄と両立させる事は

不可能では無く、その利益の公平な配分は、社員に対してであり、コミュニティに対してであり、更には地球環境に対してであるべきです。

即ち、社員、株主、取引先、サプライヤー、地域、地球までもがステークホルダーであるという思想です。「SDGs」とは、地球生命体との共生であり、富めるものと、そうでは無い者の共生であり、又、対立する会社や国家との共生でもあるという事です。

つまり、繰り返しますが全てのステークホルダーとの共生であると言う概念です。

そして、そのためのテクノロジーであるべきなのでしょう。

これから、生成AIがどこまで行くのか？  
おそらく今後20年間で30万倍の成長を遂

げると言われるAI。

私には到底予測不可能ですが、その事に漠然と怯えていても仕方のない事だと考えます。

ここで、リチウムイオン電池を開発した吉野彰先生の言葉で締めくくりたいと思います。

(以下、引用)

「現在から」、ではなく、「過去から」、未来を見ることです。

今、世の中でトレンドと言われている情報をたくさん集めて未来を予測しようと試みても、変化のスピードが早く、情報が溢れている状況下ではピシッとした照準を絞ることができない。IT革命で、時代はめまぐるしく動いている。

将来の予測をする上で重要になるのは、

(1) 過去数十年という短いスパンで人類の

歴史を眺めて、過去から現在までの変化をたどってみることです。もう一つは、(2) 過去1000〜2000年という長いスパンで人類の歴史を捉え、大きな流れをつかむことです。私は、長短のスパンで時代を読むのが大切だと思う。

技術というものは、日進月歩で変わります。しかし、次々に便利なITツールが登場しても、「人間の本质」というものはそう大きく変わりません。

世の中は、なぜ今日のように変化してきたのか、どうして人々の意識は移り変わったのか、過去の歴史で似たような事例はなかったか、現代の変革で参考になる出来事はなかったか。過去からの歴史の延長線上で5〜10年の近未来と20〜30年の中期の未来を想像する。自ずと、照準は絞られてくるはず

## 敬天愛人と『土中の死骨』

宮下 亮善



南洲翁の最後について知りたい。「南洲翁は西南戦争の最後に傷を負い別府晋介に介錯を頼み自殺したとしているが、一部の学者は、南洲翁は傷を負ったときに既にしゃべることができなかったという説をとっている。そ

のとき、仲間の武士たちが名誉ある死を南洲翁は選んだと行って死んでから介錯したとの説もある。本当はどうなのか聞きたい。」この質問は西日本国際財団主催による異文化交流におけるインド人留学生の質問です。

さて、この質問にどれだけの人々が的確に答えることができるでしょうか。とにかく思いつかない事を鹿児島の人々が考えつくの

であればまだしも福岡に來ている留学生の質問です。読者の皆様方はいかがでしょうか。

鹿児島の人々が一般に聞かされている説は、いよいよ死を覚悟した南洲翁は東京に向かい明治天皇にたいして黙礼しその後「晋どん晋どんもうよかろう」と別府晋介に介錯をたのみ切腹して果てたと言ひ伝えられていました。この説にインド人留学生は疑問を呈しているということでした。その真相はいかにと。

ここに、『西南戦争と博愛社創設秘話』発行者日本赤十字社熊本支部によると、南洲翁の戦いの後に行われた死体検査書には次のように書かれている。

(衣服) 浅黄縞 単衣 紺脚絆

(創所) 頭頸体離断

右大腿より鎖骨部 貫通銃創

右鎖骨部舊刀創

陰囊 水腫

いわゆる検死録です。頭と首が体から離断されたと言うのは、ゴシゴシと首をしごいて切った場合に使われるという。弾は一発、太ももより、横向きに当たっている。従来の説とはおおいに異なるものです。つまり、南洲翁は切腹をしてはいないということの意味している。

明治十年九月二十四日早朝、官軍の総攻撃が始まった。南洲翁は城山の洞窟を出て最後の関兵を終えると三人の護衛を従え岩崎谷の方へ坂を下って行った。この様子を警視庁石神矢次郎らが護摩所のあたりから目撃していた。その後足を負傷していた別府晋介がコシに乗って続いた。別府には従僕の豊富金石衛門、小杉恒右衛門、城川市二の三人が付き添いコシを持っていた。しかし、一人に弾丸が当たり、コシが使えなくなつて、別府は従僕に背負われて岩崎谷を下って行った。別府

らが追付いた時、南洲翁は腰を撃たれ、脚を上げて止まっていた。その時官軍安村中尉は南洲翁を生け捕りにしようと近づいたが、安村に弾丸が当たり負傷した。安村中尉はなおも南洲翁をとらえようと近づき、二人は取っ組み合い、上になり下になったりしていた。その後別府は横になった南洲翁の肩のあたりを踏み、首と胴を切つて離した。弾丸飛び交う中、南洲翁最後の顛末として、この惨状が秘話として語られている。

そもそも敗軍の将は「城を枕に討ち死に」が、将たるものならいとされていた。南洲翁の場合、城山洞窟の前がその場であった。しかしそうはならなかった。何故か。安政五年（1858）十月から翌年にかけて行われた大老井伊直弼の反幕府勢力に対する弾圧は苛酷を極めた。公家では一橋派を中心に、また諸大名、幕府役人など多数が罰せられ、数

多くの志士たち百余人が連座させられた。吉田松陰、橋本左内、梅田雲浜、頼三樹三郎など有為の青年志士たちが維新動乱の中に散っていった（安政の大獄）。

“くもりなき心の月と諸共に沖の波間に  
やがて入りぬる” 月照

“ふたつなき道にこの身を捨小舟

波たたばとて風ふかばとて” 西郷隆盛

勤王僧月照は勤王の志士たちと交わり、逮捕の危険を逃れて南洲翁と京都を脱出、薩摩へ逃れた。しかし薩摩藩内では島津斉彬の死後、情勢が後退し、重臣たちは幕府の圧力を恐れて月照を匿うことを拒絶し、結果「日向送り」国境で月照を切り捨てるといふものであった。南洲翁はここにおよんで月照を守る責任を果たせないことを苦にして、月照と死



錦江湾大崎鼻沖入水・月照（清水寺像）

ぬ決意をする。安政五年十一月十五日、平野国臣下僕重助とともに錦江湾を東に船出し、冬の月を眺めながら酒を汲みかわし、やがて南洲翁は月照を抱えて入水した。

南洲翁は奇跡的に助け出されて蘇生したが、月照はついに息を吹き返すことはなかった。天の配剤か、奇跡的に生還した南洲翁の懊悩はいかばかりか、土左衛門として生き恥を晒し、悔恨の念は募り、武士の面目もたない心境。いよいよ天命を悟るほかはない。九死に一生をえて、「命もいらぬ、名もいらぬ、金もいらぬ」自らを「土中の死骨」と徹底的に蔑む境地をこの時に会得したものと思われる。

このような失意のなか、安政六年（1859）に奄美の龍郷に流され、文久二年（1862）徳之島、さらに沖永良部に遠島される。

南洲翁三十四才。南洲翁を乗せた船は沖永良

部の伊延港に着いた。代官が迎えにきて、馬に乗せて牢獄のある和泊まで移動しようとした。南洲翁は「自分が大地を自分の足で踏むことができるのは、これが最後かも知れない」と言い、馬に乗るのをことわり死の覚悟の歩みを進めた。

屋外に設置された約二坪の囲い牢屋にいられ四方は壁なく、雨・風は吹き込み、半分は便所で間仕切りはなく、その匂いは充満し吐き気をもよおすほどであった。食事は囚人食として、朝一回飯を炊き薄い味噌汁。昼と夜はその冷や飯を水づけにして、一つまみの塩をふりかけて食べた。また、夕方になると無数の蚊の大群に襲われる。

このような惨状をたまりかねた牢番土持政照は代官所に出向き、囚人南洲翁の送り状の閲覧を申し出た。「囲入」とは書いてあったが、どこにも「外牢」の処置を指示され

てはいなかった。そこで土持政照は代官に対して、自分がその責任と費用をすべて負担するからと、座敷牢に移すよう懇願し代官はそれを許した。

一度ならず、二度までも死の淵を彷徨う身の上に、天は、再び生きよと赤誠の人士持政照を遣わし、維新回天の大いなる試練を与えた。

『獄中感有り』

朝に恩遇を蒙るも夕べには焚坑せらる、  
人生の浮沈は晦明に似たり。

縦い光を回らせさずとも葵は日に  
向かう、

若し運を開くこと無くとも意は  
誠を押さん。

洛陽の知己は皆鬼と為り、  
南嶼の俘囚は独り生を窃む。

生死を何ぞ疑わん天の付与なると、  
願わくは魂魄を留めて皇城を護らん。

『敬天愛人』の思想はこのような艱難辛苦の  
境地から悟られたものと思われる。

道は天地自然の物にして

人はこれを行うものなれば

天を敬するを目的とす。

天は人も我も

同一に愛し給うゆえ

我を愛する心を以て

人を愛する。

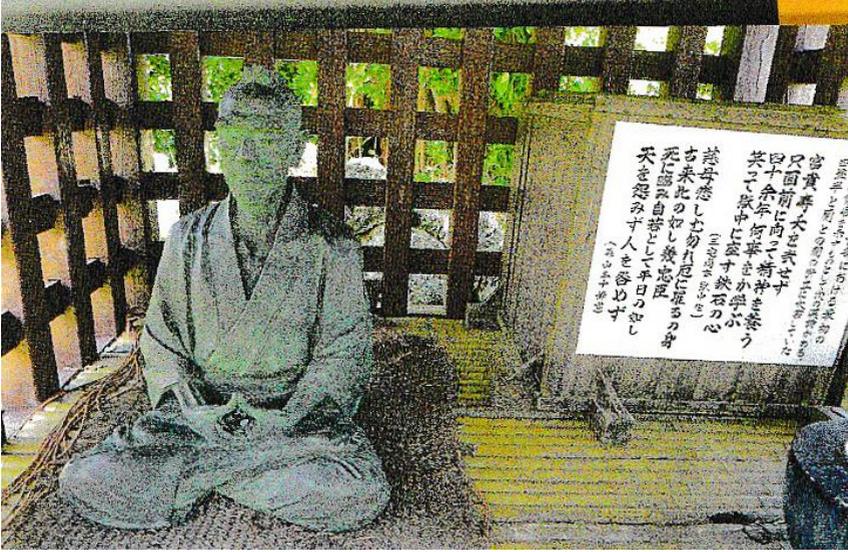
人を相手にせず

天を相手にせよ。

天を相手にして

己を尽くし 人を咎めず

我が誠の足らざるを尋ぬべし。



死を覚悟の入牢（和泊の代官所敷地内にあった牢獄）

〃明日ありと思ふ心のあださくら夜半に  
嵐の吹かぬものは〃

親鸞上人は養和元年（1181）天台座主  
慈円のもと得度受戒した。この詩九才にして  
詠んだもの。以降、苦節二十年比叡山に籠も  
るも比叡山を下りる。その決別の大きな理由  
は、自ら悟りを求めて厳しい修行に明け暮れ  
ても、その煩惱妄想を断ち切ることができず  
に苦行を捨てざるを得なかったということであ  
り、親鸞の苦悩は古くて常に新しい根源的  
な問題を今もなお投げかけている。《妻帯の決  
心》「祈ることで悟りを得ることのできない愚  
かな人間である」として、自らを『愚禿親鸞』  
と称した。〃善人なおもて悪人おや〃唯々、  
弥陀の救いを願う「他力本願」の教義を確立  
した。逆説的に問うならば比叡山の厳しい修

行の体験から生まれたものであったとも言える。

〃釈迦といういたずらが世に

出でて多くの者を惑わするかな〃

もう二題

〃世の中は喰うて稼いで寝て起きて

それからあとはただ死ぬるばかり〃

〃生まれては死ぬるなりけりおしなべて

猫も杓子も釈迦も達磨も〃

頓知ばなしで有名な禅僧。一休宗純和尚の歌か、道歌か、一休さんらしい皮肉まじりの歌とでも言いますか。自分自身は欲望のおもむくままに自由自在に、この世を気ままに生きたいのに、釈迦が欲を去れ、煩惱を捨てよと説教するものだから迷惑この上もないと、愚痴をこぼしている。二十七才の時、夏の夜の闇に鳴く鳥の声を聞き大悟した。自らを『狂雲子』と蔑み、肉食妻帯を犯し、煩惱に悩み、盲目の森侍者を側女として溺愛した。印可状（悟りの証明）を破り捨て、人間の偽善を喝破した。

『土中の死骨』『愚禿親鸞』『狂雲子』その言葉の表現は異なりますが、内なる自身を徹底的に覗き込み人間の苦悩の本質を見たがため、徹底的に己の愚かさを自己表現したものであり、求道これ道、達観したその先に全てを捨て去った境地を得たものであったと理解できる。

親の心子知らず、南洲翁の懊悩を知らずして、唯々、その功業を誇り、また、城山の非業の死を恨むことに明け暮れる言動は果たし

て南洲翁の魂を慰めることになるのであろうか。大久保甲東公に対する島田一郎等の「斬奸状」を手にして、警護を付けなかったその心境はいかばかりか。はからずも、心ならずも、南洲翁を死に追いやった痛恨の念を知り思いがする。そこには、維新回天に命がけで走り抜いた両雄の死をも超越した絆の深さを思い知らされるものがある。否、知らなければならぬのである。

何故、南洲翁は城山洞窟前で切腹しなかったのか。それは、何が武士か、何が維新の三傑か、何が陸軍大將か、まさに武士を捨てたということであつたと推量される。

上野の、城山下の、溝辺空港前の銅像、今に南洲翁居ませば「何というゲンネコツするか」と、大目玉を食らうこと必定かと。「コン土左衛門を」と。

(天台宗大雄山南泉院住職)



## 「そよ風通信」

入来院 久子



ちに、我が「入来花水木会」にも辿りつき、  
入来の町おこしで頑張っているのが嬉しくて  
お手紙をくださったということだった。

今年の7月の下旬。東京西新宿の法律事務  
所から突然、封書が届いた。

「なんだろう？法律に触れることなどし  
た記憶はないけど・・・」

驚いて封を開いてみれば、それは「みぞぐ  
ち法律事務所」溝口敬人弁護士からの丁寧な  
書状と事務所の所報だった。

なんでも溝口弁護士の祖父・萬五郎さんは  
入来院本家の出だというので、溝口弁護士が  
仕事で鹿児島を訪れた際、入来にも足を運び  
入来郷土館の資料で萬五郎の名を見つけ、調

べれば本家二十七代当主入来院定経の末子で  
溝口家に養子に入ったと判明。それで、ご先  
祖の入来院に興味を持って色々調べていくう

同封された「そよ風通信」という所報に、

溝口弁護士が入来院について書かれた文章が  
掲載されていて、それが面白かったのでこの  
「炉ばたセイ談」で紹介してもいいか尋ねる  
と、快諾してくださったので、私が経緯を説  
明して原稿をそのままここで発表させていた  
だくことにした。但し、本号では弁護士らし  
く「入来文書」の中の裁許状を解説されてい  
る「そよ風通信」第21号の序文（鎌倉時代  
の裁判の仕組み）をまず掲載させていただき、  
素晴らしい本文の「入来院のこと」は来年の  
号で紹介させていただこうと思う。

今回このように、入来院本家筋のお方とご  
縁が出来て、心から嬉しいと父と一緒に感謝  
している。

（入来花水木会会長）

# 鎌倉時代の裁判の仕組み

弁護士・みぞぐち法律事務所

溝口 敬人



当分イタリヤに行けそうもないので、七七〇年以上前に私の祖先が関わった鎌倉時代の裁許状（判決書）を見つけて読み解いてみました。この裁許状は、東京大学資料編纂所の「入来院家文書」（次ページの写真）の中にあります。鎌倉時代の裁判については、岩波新書の近藤成一『鎌倉幕府と朝廷』186頁以下にわかりやすい説明があります。入来院のことも記述されています。

鎌倉時代の裁判は相論といい、訴人（原告）が訴状を提出すると、裁判所は受理の手続きをした後、論人（被告）に回答を命じる文書

（問状）<sup>とひじょう</sup>を訴状と一緒に送ります。論人が回答を記した陳状を提出すると、裁判所は、今度はこちらを訴人に送ります。訴人は、陳状に対する反論をまとめた2番目の訴状を提出し、これに対し、論人も2番目の訴状に対する反論をまとめた2番目の陳状を提出します。この訴状と陳状の交換を3回繰り返します。（三問三答）。

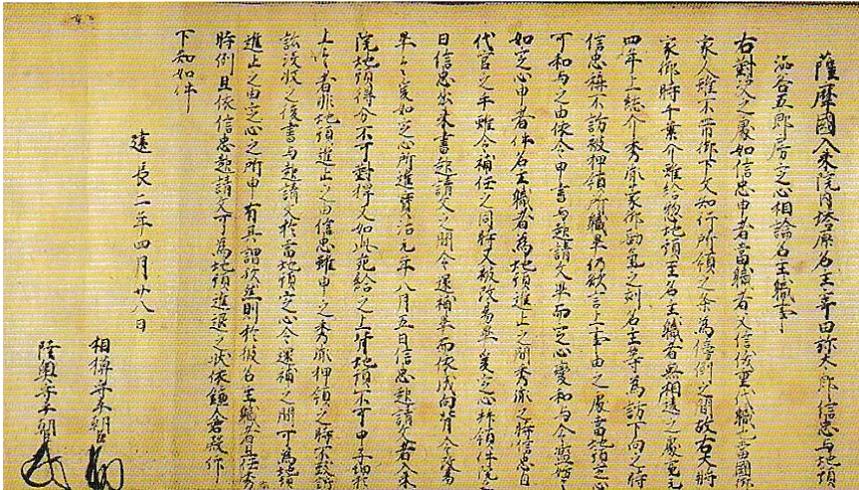
三問三答が済むと、訴人と論人に出頭を命じる召文<sup>めしごみ</sup>が出されます。訴人と論人が裁判所に出頭すると、担当引付の奉公人が三問三答を逐げた文書を回収し、相論の論点をまとめた上で、両者から口頭で質問し回答させる問注をします。問注が終わると、引付は判決原案に相当する勘録を作成し、評定衆に上程してその意見を得て落着<sup>おちまき</sup>させ、裁許状が清書されます。裁許状は勝訴した側のみ渡されるのが通常だそうです。

鎌倉時代は、所領相論が多発した社会で、裁判の仕組みも整えられていったようです。文書の三問三答で双方の言い分を尽くさせ、口頭の問注を経て、勘録を作成し、評定衆の意見を得て落居させており、裁判の公平さを期する工夫がされています。

以上、「みぞぐち法律事務所報第21号  
(2022年春)」の序文より転載



みぞぐち法律事務所報  
「そよ風通信」第21号・第22号



関東裁許状案 (入来院家文書 82 号)

# 海国日本

奥村 太



この度、入来院久子様のご好意により「炉ばたセイ談」へ寄稿させていただきました機会をいただきました奥村 太（おくむら ふとし）と申します。なに分、この様な冊子へ文章を書くといった経験がないことから、皆様のお目汚しにならないか心配ではございますが、折角いただいた貴重な機会ですので少しでもだけお付き合いいただければ嬉しく思います。本題に移る前にまずは自己紹介をさせていただきます。

私は昭和57年生まれの41歳で、家族は妻とペットの犬（ヤマト）となっております。私の出身は神奈川県相模原市というところで高校卒業まで生活しており

ました。高校卒業後単身オーストラリアに行き、シドニーにあるニューサウスウェールズ州立大学に入学し卒業までの4年間を現地で過ごしました。大学卒業後は日本に帰国し海上保安庁という政府機関に入庁いたしました。入庁後は教育機関である海上保安学校がある京都府の舞鶴を皮切りに、石川、広島、沖縄、大阪、東京にある巡視船や陸上部署での勤務を経て、昨年（2022年）4月から鹿児島に所属する巡視船での勤務となっております。

私の勤務しております海上保安庁という組織は、最近ではドラマや映画、テレビなどで少し名前を目にする様になってきましたが、主な活動場所が「海」ということもあり、なかなか国民の皆様の目に映る場所で活動することが少なく、馴染みが薄いと感じている方も多いと思います。そこで今回は折角の機会ですので、私が勤務しています海上保安庁に

ついでに少しだけご紹介させて頂ければと思います。(あまり堅苦しく描いてしまうとつまらなくなってしまうとも思うので、記載内容や表現については少し平易なものにさせていただきますが、その点についてはご容赦いただければと思います。)

海上保安庁という組織は、簡単に言いますと海の警察と消防となります。陸上はそれぞれが別々の組織となっていますが、海の上のことに関しては陸上における警察の仕事も消防の仕事も海上保安庁が担っています。そもそも、海の治安維持や安全確保といった仕事は、太平洋戦争前には旧帝国海軍が一元的に担っていました、しかし太平洋戦争で敗戦したことで旧帝国海軍は解体され、戦後日本の海には治安維持や安全確保を担う組織が無く、密貿易や密入国を含む様々な犯罪が横行する「暗黒の海」の時代が訪れました。

この様な状況を問題視した当時の日本政府は米国を中心とした連合国との折衝の末、海上での治安維持及び人命・財産の安全確保を主任務とする新しい組織として1948年5月1日に当時の運輸省(現・国土交通省)の外局として「海上保安庁」が設置されました。海上保安庁の創設にあたっては、米国の沿岸警備隊(コーストガード)がモデルとされましたが、組織の性質については「非軍事性」が明確化され、純粋な法執行機関として今日まで活動を続けることとなっています。

(※海上保安庁法により、当庁の任務には「海上における法令の励行、海難救助、海洋汚染の防止、海上における犯罪の予防及び鎮圧、犯人の捜査・逮捕、船舶交通に関する規制、水路・航路標識に関する事務、その他海上の安全の確保に関する事務」とされている。)

設立以後、時代ごとのニーズに答える形で

徐々に強化され、今では職員数約1万4千人、船艇約450隻、航空機約90機を擁する世界でも有数の海上法執行機関となっています。

皆様ご承知のとおり、日本はその国土の四方を海に囲まれており、周辺国との国境は全て海で隔てられています。その様な地理的特徴と太平洋戦争を含む歴史的背景から、北方領土、竹島、尖閣諸島といった課題を抱えています。この様な日本の現状において、周辺国との関係を不必要に悪化させず軍事的な衝突といった不測の事態を避ける意味において、「非軍事」組織である海上保安庁の重要性が年々増している状況にあります。皆様の中には、海洋進出を拡大する中国等に対して「なぜ海上自衛隊が対応しないのか？」という疑問をお持ちの方もいらっしゃるかと思いますが、状況を軍事的な衝突に発展させずあくまで平和的に解決するためには、軍事的組織で

ある海上自衛隊ではなく非軍事組織の法執行機関である海上保安庁が矢面に立つことが、日本の平和と国民の皆さまの安全安心の確保につながるものとなっています。少なくとも海上保安庁の職員についてはそうであると信じて日々の業務に従事しています。

この度、初めての鹿児島勤務となりましたが、この、侍の魂が至る所に根付いている当地での勤務は身が引き締まる思いがする一方、その様な環境において日本と日本に住む皆さんの安全安心のために任務従事できることをとても嬉しく感じています。まだまだ若輩の身ではありますが、これを機会に皆様と交流を深めさせていただき、多くのことをご教示頂ければ幸いです。

(海上保安庁一等海上保安正)

## 一周まわって縄文人



山本 洋子

鹿児島大学へ進んだ娘が春休みに帰省し

たタイムリングでかねてより計画していた伊勢神宮へ久しぶりに家族そろって車で出かけた。出発は主人が仕事から帰ってきてからの午前零時すぎ。伊勢神宮までの目標時刻は午前八時。一泊二日の弾丸強行スケジュール。きっかけは娘の高校受験にまでさかのぼる。合格祈願とプチ旅行を兼ねて秩父にある三峯神社へ参拝した際、初めて御朱印帳を購入したのだが、宮司から一ページ目と二ページ目は伊勢神宮の外宮と内宮用にとわざわざ開けて御朱印をもらったからだった。

関東屈指のパワースポットとも言われる

三峯神社。なかでも毎月一日のみ販売される白い気守りを求めて北は北海道から南は沖縄まで全国から参拝客が後を絶たない。あまりの大渋滞で問題となり白い気守りは私たちが参拝した日を境に現在は販売休止中になっている。

三峯神社をもつてしても伊勢神宮はやはり別格なのだ。当たり前といえばそれまでだが、なんせ八百万の日本の神様である。せっかく伊勢神宮へ参拝するならば少し勉強してからお詣りしようという今風にわかりやすく読める日本書紀の本を買い求め、日本の神様で疑問に思うキーワードについても色々調べてみた。

これがなかなか面白い。見てはいけないと言われているのに見てしまったり、夫婦喧嘩をしたり嫉妬したり、妻を選び好みしたりと神様なのにそれぞれ人間くさいことこの上な

い。日本人の総氏神とされる天照大神がなぜ伊勢神宮に祀られているのか。外宮に祀られている豊受大御神は天照大神のお食事担当でよばれた神様であるなどそれぞれの神様のエピソードをひもといていくと本当に不思議がらばいで奥が深い。

調べていくうちにふとある疑問にたどりつく。「でも、神様が現れる前にも日本には人類はいたわけで・・・」そう、縄文人である。

しかも一万三千年近くも続いた時代である。世界中さがしてもこんなに一つの時代が続いた国は世界中のどこにもない。この事実を改めて考えるとなんとすごいことだろうか。今まで考えたかだか二千年ちよい。外部からの稲作文化が入るまでは争いがなかったと言われているからともと私たちの祖先は争いごとの嫌いな平和で温厚な民族だったのだ。そして不思議なのはよそから来た民族に征服され

ずに融合していったこと。やって来たのがアングロサクソン系じゃなかったからなのかもしれないが、なかにはユダヤ人ではないかと思われる造形をした見事な土偶が出土されている。いわゆる外国人も上陸して暮らしていたのであろう。私たちの遠い祖先の縄文人はよその民族からみても、土偶や土器に見られるように他にもなにか高度な文明を持っていたのではないだろうか。

もともと縄文人がもっていたアニミズム文化と天孫降臨からなる天照大神を筆頭とする神道が交わって神社や祭りのもととなっている。日本人なのに歴史は学んでも縄文から古事記までのいわゆる日本人としてのアイデンティティがギュッと詰まった部分の教育を戦後生まれの私たちはほりさげて受けていない。一説によれば、外国が日本の強さはなんなのかを研究して出した答えが「天皇制」で

あるから、終戦後ねこそぎ教育から外したとも言われている。天皇の先祖はいわずもがな天照大神である。しかし、どんなに外国から操作されようと気づいてしまうのだ。私たちが日本人は世界でも類をみない賢い民族だということを。

漢字にひらがなにカタカナを操る日本人。アジア地域において漢字をギブアップした国もあるなかで、さらに日本では音読みと訓読みまで使い分けている。漢字の送り仮名だつて何通りもあり、使う人のニュアンスで使用する。言葉は一つの文化であり、民族そのものの知性を表していると思う。とはいうものの、このややこしい表記が面倒に感じる場面があるのもまた事実。

先日、息子の中学校のPTA会費と学年費を振込に指定のJ Aまで行ったときのこと。機械で打ち込みも出来ずと受付で言われた

が、手続きでモタモタしてATM機を独占するのも気がひけるので結局用紙に記入して処理してもらうことにした。

それぞれの支払先が違うので二枚記入する。名前も住所もそれぞれにフリガナを書く。これがまた書き込み欄が小さくて面倒くさい。一通り記入し受付の女の子に提出する。「なにか抜けてたら言ってくださいね」OL時代事務職が大の苦手だった私は前もって断りを入れる。にこやかに対応してくれた受付嬢は早速日付が抜けている点を見つけて返され、日付を記入し再度提出する。

しばらくすると「すみません」と再び呼ばれ、一枚の振込用紙の中学校のフリガナが「チヨウガッコウ」と間違つて記入していることが発覚。

「ヨをユに上手に訂正できますかね・・・難しいですよね」

受付嬢が申し訳なさそうに言うので「うう  
う……。書き直します！」と最初からまた  
書き直す。心のなかで「フリガナなんて必要  
か？」と悪態をつきながら。

いま、こうして文章を打つパソコンのキー  
ボードにさえ「カタカナ・ひらがな・ローマ  
字」変換があり、こんなところからも改めて  
日本人は複雑で多様な民族であることが垣  
間見えてくる。どんなに時代が進もうとも、  
日本人のDNAには縄文時代からの血が脈々  
と受け継がれているのだ。AIの時代に縄文  
人。あえて私は原点回帰で古代の人々に思い  
を馳せる。

(庵主・入来院重朝氏の次女)



## 酒池肉宴

～ 入来薪能のポスター貼りバイトで  
よみがえる鹿大生時代のよき思い出 ～



串田 達治

令和四年秋号の炬ばたセイ談にて、平成二十三年に不慮の事故で亡くなった祖母の葬儀後におけるかなり衝撃的なエピソードを紹介してしまったので、もう二度と原稿依頼など来ないだろうと思っていたのだが、先日（令和五年六月三十日）祖母の十三回忌の法要で久々に入来を訪れた際に母からまた次回もユニークな原稿よろしく！と頼まれてしまい、逆にハードルが上がりがすぎて困惑している。あれ以上のネタなんかあるわけか・・・

まあぼやいても仕様がないので昔のアルバムなんかを引っ張り出したりしてあらためて過去を振り返ってみると、やはり私と鹿児島を結びつける一番の思い出はサークル活動に熱中した学生時代であり、かれこれ四十年の人生の中で最も熱く、且つちゃらんぼらんな時間を過ごしたと断言できる。ちなみに私の妻はサークル時代の二学年下の後輩にあたる。

今から二十年以上前の梅雨が明けるか明けないかくらいの気だるい時期、今回の物語は入来に住んでいた祖母から例的特徴的な高い声で突然電話がかかってきたところから始まる。

「もしもしくたつちゃん？ 久しぶりね。ちよつとお願いがあるんだけど」

・・・・・・・・・・・・・・・・

高校を卒業するまで地元香川でのんびりうどんを食べて過ごしてきたが、大阪で一年間の予備校生活を経た後、サブタイトルにもあるように平成十三年に鹿児島大学農学部は無事合格し、以後数年間市内を流れる甲突川を眼下に見下ろせる高麗町のアパートで一人暮らしをしていた。

地元の友人らは揃って関西、関東方面に進学したため当然まわりには知り合いどころか四国出身者自体皆無であり、不安な気持ちで慣れない校舎の中をひとりウロウロしていると先輩と思しき綺麗なお姉さんに声をかけられ、そのまま新入生歓迎会場に拉致された。

連れて行かれた先は音楽系サークルが集まる一角で、案内された場所の立て看板には「鹿大混声合唱団ポリフォニー・コール」と書かれてあった。二年後に創立五十周年を控えた総勢六十名を超える鹿大でも有数の大規

模サークルらしい。当然無理やり連れてこられたのでこのサークルに対する私の第一印象はあまりよろしくなかったのだが、活動の説明を聞きながら諸先輩方から飲み物やお菓子などの過剰な接待を受け、その日の夜は大学近くの喫茶店でご馳走になり、その後カラオケで楽しい時間を過ごしているうちにだんだんと居心地がよくなってしまい、そのまま居ついてしまった。

と、こんなことはどこの大学の新歓時期にもよくある話で、テニスサークルみたいに何もしなくても勝手に人が集まってくるようなイケてるサークルとは違い、合唱なんかは特に男性はほとんど寄ってこないなのであの手この手を使って簡単に騙せそうな新入生に狙いをつけるのだという裏話を入部後に自分を拉致した女先輩から聞かされた。

二年生になって今度は自分たちが哀れで

無知な獲物を狩る側になり、途中退部者を出さないよう新入生に気を使いつつ役員である三年生たちにこき使われる日々を過ごす中で、それなりに自分のサークル活動に対する頑張りが認められ、次期部長候補として庶務局長という役職を仰せつかっていたが、何のことはなく要するに部の雑用係であった。

そんな夏の合唱コンクールに向けて桜島の灰と戦っていた七月頃だったかと思うが、入来に住む祖母から突然電話があった。何でも九月頭に川内市総合運動公園で開催される薪能の宣伝ポスターを市内の掲示板に貼るのを手伝ってほしいという内容だった。

当時ほとんど入来に遊びに行けてなかったことを申し訳なく思っていた折だったので二つ返事でそのポスター貼りのバイトを引き受けた。残念ながらバイト代は出せないが、手伝ってくれた人には城山観光ホテルの朝食

バイキングに招待してもらえんという特典が大きな決め手だった事は言うまでもない。

近々祖母が薪能関連の用事で市内まで出てくるとの事だったので、県文化センター前で待ち合わせをしてポスターを受け取る事となった。西郷隆盛銅像を背に祖母を待つっていると、見覚えのある軽自動車が今まで見たことがないようなおそろしいまでの低速で私に近づいてきた。きれいに折りたたまれたサイドミラーにしばらく目を奪われていると開いた窓から祖母が笑顔で手を振るのが見えた。

・・・この状態で入来峠を越えてきた・・・  
だど？

久々に会って興奮気味に薪能開催に向けて宣伝活動を頑張っていると熱く語る祖母の姿かとても輝いて見えた。対照的に学業をおろそかにし、好き勝手ばかりやっている孫の姿は祖母の目にどう映っただろうか。

それはともかく、運転に支障が出て危険極まりないので別れる際にサイドミラーを開くよう指摘すると、例のいつものテンションで「あらほんと。全然気づかなかったわくおほほほ」

と笑いながら何故かリアワイパーを作動させつつ来た時と同じようなノロノロ運転で去って行ってしまった光景は印象的すぎて今でもよく覚えている。車が見えなくなるまでしばらく観察していたが、残念ながらその後ミラーが開かれることはなく、そのまま照国通りの方へ姿を消してしまった。

当時多数の後輩がいたおかげでポスター貼りのバイトは合唱練習終わりから始めて一日で無事完了した。手伝ってくれた後輩たちと城山観光ホテルの朝食バイキングをととても楽しみにしていたのだが・・・

なんということでしょう！直前に悲劇が

起きてしまった。

朝食バイキングに招待された数日前だったかと思うが、飲み会の席で鳥刺しにあたってしまったのだ。

香川ではまず見かけない鳥の刺身というものが珍しくて栃木出身の同級生とふたりで大量に食べてしまったのがよくなかったらしく、二人とも間もなく嘔吐下痢を発症した。一緒の席にいた地元民がみんな無症状だったのはやはり体内にある程度抗体があったからなのだろうか。

今でも思い出すとゾツとするが、高熱のためフラフラな状態で鋭い下腹部の痛みと吐き気が一気に襲ってくるのだ。一晚中上からも下からも突き上げてくるあの恐怖はそれまで経験した腹痛の中でもダントツで辛かった。

朝食バイキングに招待された当日は祖母と面識のない後輩たちだけで向かわせるわけ

にもいかず、市販の下痢止めと途中にあるコンビニトイレをうまく利用しながら自転車でどうにかこうにか城山の坂道を登り切った。

当時ホテルの支配人の方？と祖母が懇意にしていたらしく、わざわざ挨拶に来られたり、祖母が薪金関係者らに私を紹介してくれたりしたのだが、当の本人は下腹部を気遣いつつ必死でトイレの位置を探していたのでかなり適当な受け答えをしてしまった不本意な記憶がある。

あんなに楽しみにしていたのに！朝から肉が食えるって最高です。先輩とかほざいてくる後輩をしばく元気もなく、ただ目の前の豪華なバイキングメニューをなるべく視界に入れないようにしながらただホテルにトイレを借りに行っただけになってしまった。体調が万全ならローストビーフを盛り付けるホテルの女性スタッフが女神に見えたはずなの

だが・・・この仕打ちはひどすぎます！

.....

ところがどっこい、人生苦あれば楽ありとはよく言ったものでホンモノの肉の女神様は半年遅れで私に微笑んでくれた。

年が明けて平成十五年一月十八日、私の所属していた合唱団の第四十九回定期演奏会が無事終わり、その打ち上げの幹事が庶務局長である私だった。

血の気の多い学生たちの打ち上げ場所に選んだのは市内与次郎にある焼肉店であった。団員が総勢六十人プラスOB・OG合同ステージに出演して頂いた諸先輩方もお呼びしていたので集金するのも一苦労。演奏会をやり切った安堵感と疲労感とで意識が朦朧としながらも、無事支払いを終えるまでが自分の仕事だと思いい、最後まで気が抜けなかった。

団体客の会計だったからか、レジにて店員さんから財布に入りきらないほど大量のクーポン券をもらい、店をあとにした。

一月後半にある定演が終わってしまえば大学生にとつては無駄に長い春休みを残すのみ。相変わらずグータラしながら三月後半に至り、近所のスーパールのお惣菜にも飽きてきた頃、そういえば焼肉屋のクーポンが大量にあったことを思い出し、バイト代も入ったことだし久々に月曜から贅沢しようと思つた。軽い気持ちでバックからクーポンを探した。

よくファミレスなんかであるドリンクサービスク券のようなものだろうと思つていたその「クーポン」。

よく見るとクーポンにしてはかなりしっかりとした紙質のその「クーポン」。

ファーストドリンク無料（ただし他の券との併用はできません）などというお決まりの

文言が書いてあるはずのその「クーポン」。

・・・？その店で使える金券じゃないか・・・  
若干取り乱しながら店に問い合わせるのと、  
どうも一月いっぱいには創業何周年とかの大キヤンペーン中だったらしく、会計時に支払った食事代の半額分が商品券（その店舗の全てメニューに使用可）としてキャッシュバックされていたのだった！しかも有効期限は三月末まで。確か残り一週間ほどだったかと思ふ。

その時になつて思い返してみると、そういう  
えば「半額還元セール中」と書かれたのぼりが店舗敷地にたくさん翻つていたような気がしないでもないが、とにかく打ち上げを無事終わらせることで頭がいっぱいで、そういうキャンペーンが実施されていた事など全く思いもしていなかった。

このあたりから何故か急に記憶が定か

なくなるのだが、仮に部員六十名のうち、打ち上げに参加した人数が四十名ほどだったとして。OB・OG・顧問の先生方を含めると少なくとも総勢五十人強。焼肉食べ放題・飲み放題の費用がひとりあたたま五千円だったと仮定すると、手元にあった金券は約十三万円分だったという計算になる。

これはやばい・・・一刻も早く打ち上げに参加した部員全員に配らなければ・・・と心の中で思いつつ、ただ春休みに入って県外に帰省している部員も多く、四年生にいたってはすでに卒団式を終えていたので所在も定かではない。さらに悪いことに打ち上げ出欠名簿自体捨ててしまっていた。

・・・どうしよう・・・仮に今から郵送したとしても期限が切れそうな金券を送りつけたりすると逆にみんなから怒られる・・・  
 ・・・・でもこのまま何もせず期限が切れて

しまったら超もつたいない・・・  
 ・・・・どうにかしなければ・・・  
 ・・・・考えろ・・・考えろ・・・  
 ・・・・というわけでその日から連日連夜の焼肉パーティーが必然的に開催されてしまった。

ただ、自分だけでクーポンを独り占めするのはさすがの私でも気が引けたため、鳥刺しにあたった同志でもある例の栃木出身の同級生と、敵に回すとおつかない次期マネージャーのふたりだけを誘って共犯者に仕立てた。  
 とりあえずそのクーポンが本当に使えるかどうかまだ半信半疑だったため、初日は学生向けの焼肉食べ放題コースを選択。何かあっても自腹で対応できるようにしていたが、会計時あっさり全額そのクーポンが使えてしまった。

狂喜乱舞したい気持ちを抑えつつ、二日目

は食べ放題コースなどというお得な邪道メニューを無視し、ふだんは手が出ない特上カルビ・特上ロース・上ネギタンなどを単品で注文しつつ、ちゃっかり飲み放題をつけた。

昨日ここで食べたあの肉はなんだったのかと思うほど特上の品々は絶品だった。

翌日もまったく同じコースで贅沢しつくしたが、十何万円分の金券というのは思ったより減らない。

そろそろ特上肉も飽きてきたよね〜と他の客が聞いたら憤慨しそうなセリフを吐きつつ四日目の今日は海鮮しばりで!と、いきなりズワイガニを注文して店員を唾然とさせたりもした。

あれから二十年以上たったが、思い出すたびにほんわかする本当にいい思い出だ。

そろそろ結びになるが、当時の関係者の皆

様、本当に申し訳ありませんでした!!!

(炉ばたセイ談庵主の初孫)



# 「やんちや少年発掘記」

白男川 孝仁



## その1 「その日を迎えた」

今日は昭和41年4月1日である。

出水中学校社会部は、この春休みの期間中に出水高等学校の池水寛治先生いけみんじの指導の下、高校生のお兄さん、お姉さん方と一緒に、第一回上場遺跡発掘うわばに参加させて頂く事となった。本蔵久三先生もくらひさみつのご引率の下、社会部員達は朝8時出発のバスで上場高原に向かうが、何とバスは大川内おおかわうちの先の青椎止まりなので、残り数キロの山道を発掘道具類を背負って歩まねばならない。

部員は、二年生になったばかりのT君と、

国分研二君、一年生は先達せんたつ一男君、窪敬三君、齊藤誠君と記録にはあるが、確かに安田悟君も居た筈である。

辛い行程の筈だが、全員ワクワク感が先に出て、山の湧き水など飲みながら昼前に上場小学校に到着した。

今日から10日間宿泊させて頂く所である。

T君は小学四年生の時にこの校舎で林間学校を経験していたので、懐かしくもあった。

校舎から県道を挟んでグラウンドがあり、その先の林が発掘予定地だと説明を受けた。

そもそもT君が部長となったいきさつが変だったので説明をしておこう。

出水小学校に「出水貝塚」の展示があり、4千年前の土器や石器に興味があったので、中学生になって貝塚の近くを見学に行ったら偶然に磨製の石斧せきふを見つけた。

社会部室を訪ねたら、本蔵先生がおられ、

「そんなもん、そこに置いとけ!」「お前は今から部長だ。数日後の生徒会総会で、発掘予算を獲得して来い!」と言われ驚いた。

生徒会総会では、予算を削られた野球部やテニス部の連中から社会部の巨額請求に対し猛反発を受けたが、無事承諾を得る事が出来た。後で分かった事だが、先生方の間では先に決まっていたようであった。

## その2 「さあ、発掘だ」

発掘の方法は、現場に2m×2mの枡を縦に数個、横に数個設置して、トレンチと呼ばれるそのひと枡を2・3名ずつで掘り下げてゆくのだ。池水先生の指導のもと、全体を測量しながらの作業がいよいよ始まった。

T君のトレンチは、高校一年生で入部したての土屋タカ子さんと、名前は忘れたが大人しい感じの二年生の女生徒だった。

僕らが発掘中に考えている事は唯一つ、で

かい黒曜石こくようせきの槍などを見つけて、拍手喝采を浴びる事だった。

実はこのレコード大賞みたいな御幸運に預る方こそ、この土屋タカ子さんであるが、後述する事とする。

初日の作業は、草の根に被われた表層を剥ぐ事だが、遺物が見つかっても年代推定も出来ない採集物なので気楽なものだが、力の要る作業でもあった。

それでも表層の下から、縄文前期の「塞さいノ神かみ式土器」が発見され始めたが、まだ黒曜石の石器等の発見は、第二層、第三層の掘り下げを待たねばならなかった。

初日の夕方五時の作業終了の合図があるとT君と国分研二君は、さっさと学校に戻り、一番風呂を楽しんだがなんと最終日まで続けた。用務員のおじさんに、「もつと湯を沸かして!」だの、歌を唄って採点を求めるなど迷

惑をかけていたみたいだ。

早い湯上がりで、ビールでも飲みたいT君だったが、ビールを売ってる店など無い。近くの雑貨屋に行き、埃をかぶったウイスキーのミニチュア瓶を安くで買って来た。

国分研二君と高校一年の牛ノ浜修さんに声をかけて、給食室で夕食の準備を始めているお姉さん方の横で酒盛りを始めた。

流石にお姉さん達の通報で、先生方や部長達にお咎めを受け、宴会は即中止、主謀者と誤解された牛ノ浜さんは、厳しいお叱りを受けられ、申し訳なかった。

### その3 「レコード大賞」

昨日、表層を剥ぎ終えて、二層目の関東ローム層という赤茶けたサラサラな層を掘り込み、三層目の黒色有機層へ掘り下げていた頃であった。

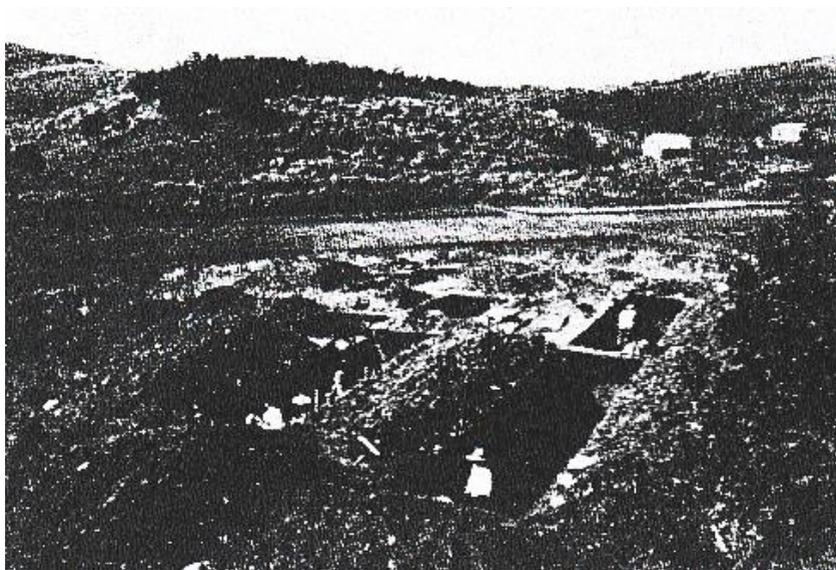
二層目の上部から、縄文早期の押型文土器

が発見され始めたので、T君は自分の靴底の型をコッソリ土で固めて、「土屋さん！この土器を先生に見せて来て下さい！」などと悪さをするのであった。

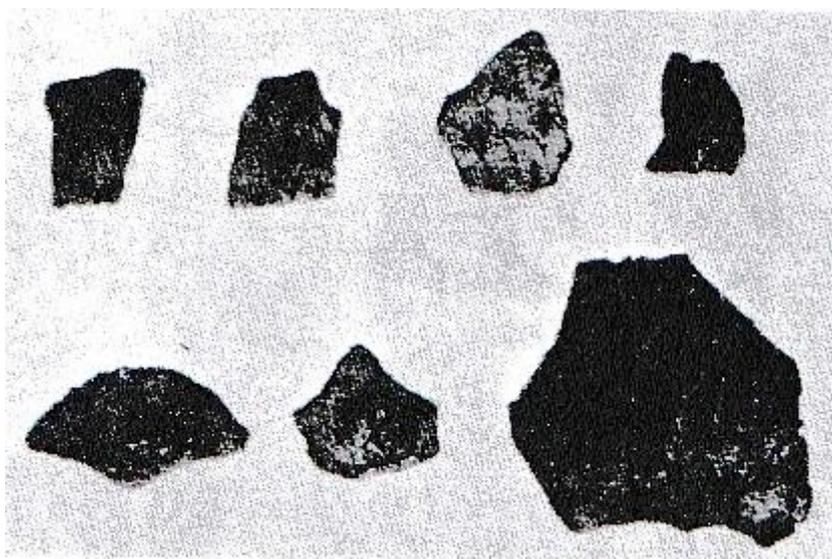
この層からの遺物の出土も多く、黒曜石の石族せきぞくや細石刃さいせきじんという縄文以前の旧石器も出始めていた頃だった。

土屋さんから『これは土器でしょうか？』と渡された土器片を受け取ったT君は、しげしげと眺め土器片の右肩をポキリと折ってから、「今度こそ先生に見せに行つて下さい」と、したり顔で指示したのであったが、それからが大騒動！ NHK、MBC、南日本新聞社まで来る始末となった。

縄文時代最古の「爪方文土器つまたたわ」との事で、令和の現代でも、上場遺跡の発掘資料の第一級品として、関係書類に写真付きで掲載されている。



上場遺跡の発掘トレンチ



爪形文土器（上段2層下部・下段3層上部）

今や半世紀以上の時が経ち、T君のポキリの悪さもお許し頂けようが、大賞受賞のご目覚めない土屋タカ子さんは、その後同学年でハンサム王子様の宮川公認会計士の奥様として、鹿児島市でご健在と伺った。

今更ながら、この「ヤンチャ少年発掘記」を御贈呈してお詫び申し上げます。

上場遺跡の発掘はその後昭和49年8月の第五次発掘まで続いたが、池水寛治先生も昭和55年に早世され、旧石器時代の稀なる住居跡の発見も立証されぬまま今を迎えている事だけが悔まれてならない。

私達中学生をご指導、ご引率して下さいました本蔵久三先生は、鹿児島県考古学会の副会長を歴任され、卒寿を超えても研究を続けていらつしやるお姿は、我々の誇りである。

#### その4 「最後に」

出水市の報告書では、昭和46年の第四次調

査の時に、東北大学の芹沢長介教授のご参加が記録されているが、実は第一次の発掘にご参加下さり、T君と国分研二君の質問にもお答え下さったのだ。

先生方のご報告には、遺物の推定年代が数万年数千年何百年(誤差数十年)とあるので、その科学的な証明方法を教えて下さい！とお願いした。

先生は私達中学生にも分かり易く、丁寧にご説明下さった。炭の放射能解析である。遺物と同層の近くの炭化物をビニール袋に入れ、放射能解析すると、その減少率で年代推定が出来るとの事で、目からウロコだった。

また、出水工業高校二年生の瀬戸久夫さんも記録から洩れているが、本蔵久三先生の中学時代の教え子として参加、卒業後は千葉県の博物館長を務め上げ、令和の現在はインドネシアに在住しながら中近東を歩き回り、考

古学を満喫され続けていらつしやる。

上場発掘の頃、丁君や国分研二君が土器や石器について生意気な程詳しくかったのは、この方のレクチャーを受けていたからである。

最近でもインドネシアから帰国の際は、一緒に乾杯するお付き合いである。

また、後輩の先達一男君は、20才過ぎの頃出水でフォークコンサートを開く程であった。

長渕剛風の曲を作っていたが、技術的には長渕以上で、曲間の語りも面白かったが、残念な事に才能溢れたまま夭折してしまった。

実は、今回恥知らずな思い出話を書き残そうと思ったのは、昨年の国分研二君の訃報である。上智大学を卒業して、東京で御活躍らしいと風の便りに聞いてはいたが、長く逢えずにいた事が悔やまれてならない。

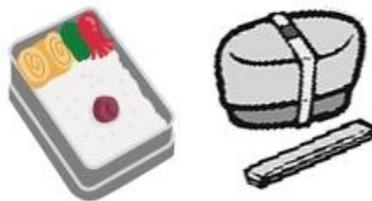
あの頃は弁当を交換して食べ、毎日好きな女の子の話しを語り合っていたのだ。

謹んで御冥福をお祈り申し上げたい。

完

(しらおがわ・たかひと)

出水市文化協会 理事  
俳句結社『河鹿』同人



## 「うむ」を考える



米森 寿美男

色々な「うむ」があるものだと思う。色々な経験をさせてもらったなあと感謝感謝の日々である。「生む」というのは女性の特権であり、大変な思いをして新しい生命の誕生がある訳で感動の瞬間である。私のところでは、三人の娘達の誕生を経験させてもらい、妻が苦勞をしたからだとあらためて感謝し、本当に頭が下がる思いである。

自分でも新しいことを経験することは何回もあることではないが、「産み」の苦しみを味わうということについて、今回は、孫の誕生、新局舎建設と現在の役職の中で味わった

感情を書いてみたいと思う。

### 一、嬉しい「生む」との出会い

それは緊迫した帝王切開の手術室から始まり、赤ちゃんが取り上げられ、元気な産声があがるDVDである。最近の産科医院では赤ちゃんの誕生の瞬間を映像で残してくれるようなサービスをしてくれるようである。コロナの影響で立ち会いや面会が制限されている中で、「生む」苦しみと戦って無事に出産するという、実に嬉しいことがあった。それは七月三〇日に二人目の孫が誕生したことである。

三女にかわいい男の子が、緊急帝王切開で無事に誕生した。考えてみると、母親となった三女もまた、同じ病院で、二十数年前の八月一日に帝王切開で生まれていた。その時、私は長女・次女と一緒に出産に立ち会うべく心の準備をして、産婦人科に駆けつけるよう

にしていたが、帝王切開となり、立ち会いは叶わぬ夢に終わった。

今回、娘婿殿も立会い出産を希望し、いつでも病院に駆けつける準備をしていたが、緊急帝王切開となり、叶わぬ夢となったが、三女は長男を無事に生んでくれて感謝・感謝である。予定日が近づいて出産がいつかいつかと待っていたのだが、予定日になっても兆候が無かったので入院となり、その翌朝無事に生まれたのである。現在は我が家ですくすくと育っており、将来の大物感を彷彿とさせている。

## 二、苦しい「膿む」はいやである

平成六年から入来郵便局長として、入来町に赴任して仕事を開始したが、郵便局は温泉場の中にあり、国道三二八号線から五〇〇mも引っ込んでいた。その頃の国道三二八号線は拡張舗装工事が進んでいる真つ最中であつ

た。局舎も老朽化し、狹隘であることから、平成十一年に局舎改善に取り掛かって良いという指示を受け、移転場所を探し始めた。

この頃から入来町は温泉場再開発事業を開始し、都市計画化を進めており、そのために温泉場の道路や区画整理が決まらずに、とても温泉場内に移転場所を見つけることは不可能であった。あれから二〇年以上が経過しているが、道路はまだまだ開通せず、住宅はまばらな状態である。

その頃から、精神的プレッシャーに弱い人間にありがちな持病が出てきて、背中にアテロームが出来て赤く腫れ上がり、寝る時も横向きでなければ寝れないことが続いた。近くの病院で「膿み」を出してもらったが、指で押さえるので痛いこと痛いこと「うーうー」という悲鳴が、その度に漏れてしまう。それが半年に一回位の割合で現れては消えていく、



入来郵便局の移転候補地



入来郵便局の新局舎

ひどいときは二、三か月後に発症することを繰り返す、何回も手術をして取り去ろうと思うが、そこが治っても他から出て来るということを繰り返すので、結局応急措置として「膿み」を出してもらおうしかなかった。

新局舎の候補地が四か所くらいあり、新しい郵便局の候補地を探す「産み」の苦しみをこの時期に味わうこととなる。最適地は旧入来駅の跡地と考え、入来町との折衝や、議会対策なども行い、あと一步のところまで来たのであるが、色々と検討した結果、東屋の撤去や公園が無くなることに對する意見などを鑑みて白紙に戻すこととした。

色々な候補地を検討していると「倦む」と思うことが出てきて、諦めてしまおうかとか、自分は恵まれていないのではないかと、嫌になることの方がたくさんあった。

しかし、多くの方々からの情報提供をいた

だき、あーでもない、こーでもないと検討していると背中のアテロームがまた腫れてくるということを繰り返して三年が過ぎ、やっと現在の国道三二八号線の旧道沿いの見晴らしの良い場所を確保することが出来て、設計図の製作に取り掛かることができた。そして、平成十五年十一月にやっと完成し、オープンすることができた。苦しい時に助けていただいた方々に感謝・感謝である。

不思議なことに背中のアテロームも郵便局の完成とともに赤く膨れることがなくなり、背中の中で大人しくしているのは不思議である。それでも数年に一回位の割合で出て来るのは仕方のないことである。

### 三、地区コミュニティ協議会会長の「産み」の苦しみ

薩摩川内市では、四八地区コミュニティ協議会があり、私は入来町の副田地区コミュニティ



風船飛ばし



入来武家屋敷群散策

テイ協議会の会長職を令和四年度から図らずも引き受けることとなった。まだまだコロナの影響を受けて各種会議や会合が制限されており、何かを実行するにも密を避けるなどの工夫が必要で、地域の融和や交流を図ることが出来るような環境に無いのが実情である。

それでも何かできることはないか考え、出来ることをやろうと役員と話し合い、通常の行事以外に初めての試みとして、令和四年度は副田小学校創立一五〇周年記念行事を行うこととした。児童や父兄に呼び掛けて一五〇個の風船を何とか飛ばすことができた。世界情勢のお陰で風船も値上がりしていたが、小学校の先生方や地域の方々のご協力のお陰で無事に風船飛ばしが実現した。

今年、例年行っていた「副田っ子学寮」を違う形にして、副田の子供たちに入来歴史を感じてもらいたいとの思いから、花水木

会で行った第二回まち街歩きを参考にして入来麓武家屋敷群を巡るスタンプラリーを企画した。郷土史研究家の説明を受けながら散策し、希望者は清色城址に登るというものでしたが、六二名の参加があった。保護者から入来町の生まれでありながら一回も廻ったことがなかったので、大変良かったと好評であった。

人生の終盤を迎え、これからも初めての出来事に出会うことと思うが、後いくつの「産み」の苦しみと出会うことができるのか楽しみでもある。そして、何とか乗り越えて楽しく過ごして行きたいものである。

(元入来郵便局長)



## これからの観光組織に

### 求められるもの

地域を俯瞰し、魅力創出・発信

できる態勢づくり



奈良迫 英光

### 一、はじめに

観光関連業界は、宿泊、航空、運輸、船舶、観光施設、飲食、広告・宣伝、旅行エージェンツ、特産品協会、お土産品、IT等様々な業種に及び、それを監督する行政の部署が関係している。

また、同業者の連携強化や上部団体との折衝、PR、販売促進を目的に、〇〇協会、〇〇組合、〇〇連合会、〇〇利用促進協会等様々な団体が組織され活動している。

観光連盟（観光協会）では、事務局を運営

するため職員、専務理事、事務局長などを擁し、各種団体と連携して、PR、誘客に取り組んでおり、職員を受け入れている組織もある。

事業運営は行政からの補助金、入会金、会員の年会費等が財源となっている。事業者の中には、同業者の組織にも会費を払っているところも多い。

財政状況はこの組織も厳しく、的確な人材配置と効率的な運営が求められている。

### 二、DMO設立の動き

今、個人旅行が主流となり、生活・文化体験など趣向の変化、滞在、スポーツ観戦、インバウンドの急激な増大、情報入手手段の多様化等に対応すべく、「地域を俯瞰する新たな観光組織」設立が求められている。

観光庁はその中心的な役割を担う組織として「DMO」の機能強化を掲げている。

DMO (Destination Management/Marketing Organization) とは、観光地経営組織である。複数の都道府県が参画する「広域連携」、複数の自治体にまたがる「地域連携」、単独の自治体や観光協会、特産品協会等で組織された「地域」の3つのDMOがある。

令和5年3月31日時点で、「広域連携DMO」10件、「地域連携DMO」106件、「地域DMO」154件が登録されている。また観光地域づくり候補法人「候補DMO」は56件である。

身近にある組織として、「広域連携DMO」に鹿児島県をはじめ九州全県が参画している(一社)九州観光機構、「地域連携DMO」に大隅地域の市町村が加盟している(株)おすみ観光未来会議、「地域DMO」として(株)薩摩川内市観光物産協会がある。今後

登録は増加すると思われる。

### 三、DMOは何のために組織するのか

DMOの設立は「稼ぐ力」を主眼にしてきた。しかし現在は、地域への継続的な交流人口拡大を図るべく、「司令塔を担う法人」としての機能強化が重要となっている。

単なる組織の集合体では持続的な運営は厳しい。複数の団体が合併する前提として、現在の運営状況、地域内の宿泊者数、どの地域から来ているか、交通手段、季節波動、経済効果等地域の強み、弱みを把握していることは設立後の戦略にも大きく影響してくる。

一方では観光の有用性を多くの人が享受できることが重要であり、地域住民の想いを結集させ事業に取り組まねばならない。観光振興をプラットフォームに、第一次・第二次産業を活用する視点で、地域資源を磨き上げ商品化する機能が求められる。

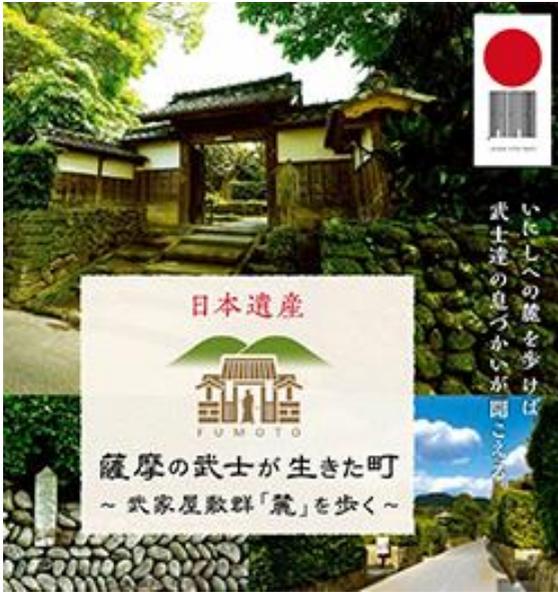
人口減少による地域の活力低下、税収不足



道の駅



温泉



日本遺産「麓」

誘致間競争の激化、旅行形態の多様化、インバウンドの急増、ICTの進展等がDMOの態勢づくりを急がせている。

今消費は成熟しており、消費者が求めるものは、「安全・安心、本物志向の商品」である。地域の生活・文化に焦点をあてストーリー性。



山城跡の堀切

をもったPRや商品を作成し「体験・交流」、「地域全体への経済効果波及」「リピーター創出」につなげる取組みが欠かせない。

#### 四、利害調整能力に優れた人材の確保と動きやすい態勢づくり

あたらしい組織を束ねるには、マーケティング力とマネージメント能力を持ち、自ら汗を掻く実務能力を兼ね備えた人材が必要になってくる。地域づくりのノウハウを知り学ぶ機会が多いが、大切なことは現場に合わせて、



甲冑

多くの意見を調整し実践していく手腕である。多様な団体との利害調整を厭わない人材が求められる。組織設立に当たっては、資金や地域での影響力のある有力者が就任するのが慣例となっているが、DMOの運営は、新しいリーダーがフットワークの取りやすい環境づくりに配慮することが求められる。

百家争鳴の議論を重ねて、参画する団体の合意形成を行っておくことが大切である。観光振興はプロセスが大事であり、数年ぐらいは任せる覚悟も必要である。

### 五、効率的運営で稼ぐ力の構築

組織運営は、「責任と権限の明確化」を図ることが事業の推進体制強化となる。

自治体の観光に関連する部門は、商工観光課や街づくり推進室、文化・スポーツ課、農村振興課、企画課、PR課等多くの部署が関係しており、国の組織に準じて縦割行政とな

っている。公益団体や民間組織では、観光協会、特産品協会、商工会議所、商工会、旅行エージェント、運輸機関等である。DMOを推進していくには、双方の業務の重複を少なくすることが基本戦略となる。自治体の業務を点検し、新しい組織に移すことで効率的な運営が可能となる。設立の際、効率の良い部門を切り離す方策だけに利用されては組織の維持は厳しい。

自治体の税収も厳しくなっていることから外郭団体への補助金も削減されてきており、同時に観光部門の人員や業務の見直し、組織の再編も求められる。

自治体が従来の組織のままでは何のためにDMOを設立したのか、その信義が問われる。

実効性のある組織運営を進めるには安定的な自主的財源確保が絶対条件である。補助

金頼みではなく、積極的に地域資源の価値創造と商品化づくりを行うことで、地域全体のPR・誘客を図り、効率的運営が可能となる。「収益性のある自主事業」を増やすことが至上命題である。

## 六、観光は地域社会産業

観光振興には、農業、水産業、商工業、食、温泉、歴史・文化施設、世界遺産、日本遺産、ガイド、教育、医療など社会的に有用で価値あるものが活かされる。

また、観光は多くの産業を繋げる力があり、地域社会産業の位置付けである。

観光商品を取扱うには、旅行業の登録も必要になる。既存の大手エージェントは旅行業務だけで稼ぐことは厳しくなっている。

DMOでは、「PR」「特産品」、「ふるさと納税返品」、「イベント運営」「観光施設や駅の管理運営」「旅行」等広範な業務の取扱ができる

かがカギとなる。

「薩摩川内市観光物産協会」は、合併前の市町村の観光・物産協会の組織を一つに集約し、利益の出る効率的な運営を基本として設立された。市役所、銀行、商工会議所、商工会等が出資した株式会社である。観光、物産、イベント運営管理、駅の改札業務、市中の駐車場管理、ふるさと納税返礼品等の業務を扱い、全国のDMOの中で成功している事例である。自治体の行っている観光業務を移管することで、即効性のある判断が可能となり雇用も拡大できる。

## 七、終わりに

ICTの進展が経済の仕組みを大きく変えており、シームレスでワンストップの態勢づくりも急がれる。YouTube、ライン等SNSを多面的に活用した情報発信が課題である。

一方、新しい組織に対し「参加企業は出資



花火大会

金が増えたが何も変わらない」、「特定の地域・企業だけが恩恵を受けている」、「組織ができたのに市や町も同じことを行い無駄が多い」などの声も聴く。

DMOは「魔法の杖」ではない。地域の新たな重荷につながりかねない要素も含んでいることも肝に命ずべきである。官民一体となり、十分な議論と検証を重ね効率的な運営ができる組織の設立を目指したいものである。

(元鹿児島県観光プロデューサー)

# 穂垂引きほだれひ

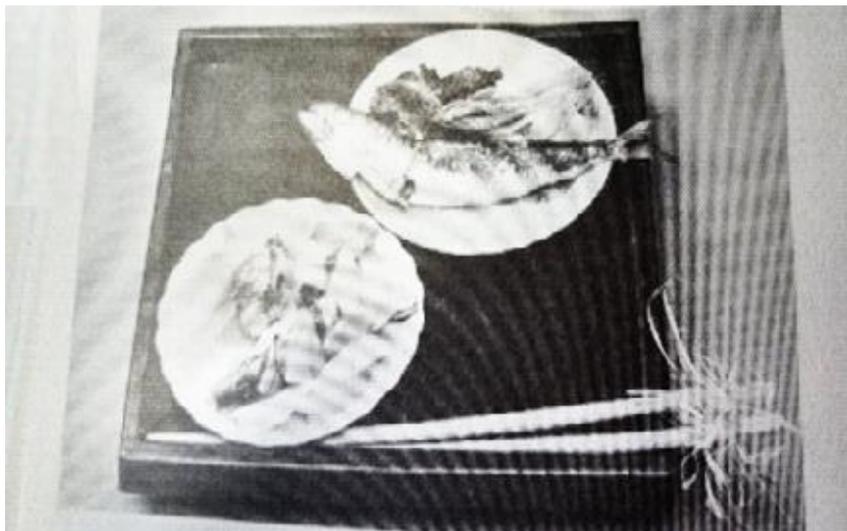
## ― 回想 入来の伝統行事 (2) ―

中山 とし子



「穂垂引き」は、旧正月の一月十五日を祝う行事です。秋の「十五夜」とともに、子供たちの参加が当然とされる、印象深く楽しい行事でした。

まず、大晦に当たる十四日の朝、山口集落にある持ち田の畔に、父親と猫柳の枝を伐りに行きます。その枝に小さくサイコロに切り分けた餅を挿して花枝を作るのです。更に大晦日の夕食は、猫柳の枝を削った箸で食べるのですが、この箸は頭の部分にささくれのような表皮の部分を残しておきます。それがままごと遊びのようで面白かった。下の写真は、



大晦日の夕食（「北薩摩〈農耕士族〉の食」より）

『聞き書き 鹿児島島の食事』（1989年）、

「北薩摩〈農耕士族〉の食」から撮ったものです。著者は、当時鹿児島純心女子短期大学教授、若原延子氏。主に入来町麓での聞き取りです。

このページの入来の紹介記事を抜き書きすると、

〈この地は、藩制時代に俸禄を田畑で支給された郷士の一群がいたところで、彼らは後に「農耕士族」と呼ばれた。その末裔が今もこの地にとどまり自らに流れる武士の血を誇りとしながら田畑を耕している。質実剛健を旨とし、決して贅沢はしないが、儀式の膳や節句の菓子作りには受け継いだ伝統をきちんと守る（略）〉

とあります。

この行事のコンセプトは、仕事を最後までせず、「仕掛けたまま」というところにある

ようです。

蓑帽子のような箸も、忙しくて最後まで削る時間がなかった事をわざと印象づけています。食べる時には大変扱いにくい。面白いのは、食べた後、その箸は洗わずに障子の棧に乗せる決まりになっていて、できるだけ背伸びをして届いたところの棧に乗せると、次の朝、（二月十五日「小正月」の朝）その箸は背伸びせずとも取れるほど一夜で背が伸びている（はず）と言いつづかれました。

削りかけの箸は、狭い障子の棧には簡単に納まってくれないし、高い場所に乗せるのは特に乗せにくかったです。しかし、姉弟で競争しながらそれをするのが楽しかったのです。

いつからこのように子供のためのゲームめいた習わしができたのか、南薩摩や大隅の知人たちに尋ねると、「穂垂引き」という言葉

も知らなかったとの返事が返ってきました。各家によっても違うでしょうが、同級生に確認すると、旧薩摩郡の地域では同じような行事が伝わっていたようです。

一月十四日は、小正月の大晦日に当たります。本正月ほどではなくとも御馳走を作るのが習わしです。でもこの御馳走は、時間がないうことを印象付けるため、野菜も魚も切らないで長いまま調理されました。先の写真の魚は鯛です。忙しくて野菜も魚も包丁を入れる暇もなかった、というわけです。なぜ時間にこだわるのか、理由は謎です。

御馳走の種類は、主に煮しめと鯛の煮つけだけですが、煮しめの大根や人参や、昆布、コンニャクなど、どれも長いままでゾロリと皿に乗っています。鯛も長いまま煮つけになつて皿から跳び出る勢いだったことを思い出

します。それらがテーブルに出てくると、何となく可笑しくて、家族一緒に苦笑しながら四苦八苦して食べていたこと。又、これも謎ですが、食後はお茶や水を飲んではいけなさとされてきました。起源に逆のぼると、何か理由があるに違いないと思っています。

『入来町誌下巻』（五二二頁）によると、中世の武士は戦場に臨む時、災厄除けの呪物としてこのけずりかけの箸を腰に挿したそうです。古代の神祭の幣だったとのこと。関ヶ原戦に参加した薩摩勢は、全員これを腰に帯びていたということです。この行事に柳を用いるのは、柳は挿し木にしても容易に根付き、柳の生えるところは水を得られるところであるなど、大昔から柳は瑞木とされていたことに基づくのだらう、との記述があります。

『入来町誌』には繭めの餅は金と銀の二種類

とありますが、思い返すと紅色もあつたので、花のような色どりの為の工夫だったと思えます。もともとは蚕神に捧げるものだったことから「繭の餅」と言います。私が五歳の頃はまだ家の中に蚕棚があつた事を覚えています。桑の栽培も盛んであつたのに、急に桑畑が少なくなつた印象があります。

この柳の枝に美しく飾つた「繭の餅」を、竈かまどの上、玄関の軒下、家の中の「ナカエ」「オモテ」の四隅、時には牛小屋にも柱の隙間に挿して飾ると、一気に家の中が華やかになり、お祭りのような華やいだ気分になつたものでした。

「繭の餅」を作るためには、当時としては当たり前とは言え、朝から蒸籠せいろうでもち米を蒸します。現代のように餅つき機などない時代ですから、竈に大鍋を据え薪を燃やして蒸す

のです。寒いこの時期、もち米が蒸し上がる薫りが家中に、又庭にまで漂い、幸せな気分になりました。

蒸籠から餅つきを始めるのは、家人にとつて重労働です。副田温泉場出身であつた母にとつて、農家のこのような面倒な行事は負担ではなかつたのだろうか、と思いを馳せています。あの母が、夫に言われるままに仕えていたことを忍従とは思わない。母は家の嫁として早く一人前になりたかつたに違いなく、父に叱られぬよう精一杯やりきることが自分の満足だつたのだらうと思えます。

この行事は各戸でやる行事です。本正月のように親戚が寄り合つてすることはないので、子供も共に、家族を総動員しなければできません。柳の枝を父と一緒に田の畔に取りに行くことから始まり、もち米を蒸す竈の火加減を見たり、臼と杵でつきあがつた餅を平たく

伸ばしサイコロに切って、まだ柔らかいうちに柳の枝に挿さねばなりません。本来は榎の枝だったのかもしれませんが、我が家に榎はありませんでした。榎は御神木として神社などの境内に植えられ、巨木になります。

Wikipedia には、日本の代表的な榎の巨木が多く取り上げられています。多くは神社の御神木です。一度祖父の出た家である今村家まで貰いに行つた覚えがありますが、それも面倒になったのか、以後榎は見えていません。

若宮神社の傍にある今村の家には、庭の真ん中に榎の大木が二本立っていました。後年、五十歳を越えてから今村の空き家を見に行つた時、二百年は優に超えていそうな二本の巨大な榎に見惚れたことを覚えています。あの木は今どうなっているだろうか。

田舎の榎にまつわる記憶が頭を離れなかつたため、奈良公園や京都の鴨川のほとりや

大きな神社などで、美しい枝ぶりの大木を見つけると、懐かしく思いました。榎は「枝の木」という名前の由来もあるくらい、枝が多い木だそうです。

だからこそ、榎の枝に粥をまとわせて稲の穂になぞらえると大きな穂となり、神にお供えして豊作を願うということになったのではないのでしょうか。この形態の事を「穂垂れ」と言い、「引き」は、穂が垂れて引きずるくらい豊かな稲穂を表すのだろうと、入来町誌などを読むと推察されます。

さてこの行事は、私が十歳になるころ（昭和三十五年頃）に廃れ始めました。世の中が急に近代化に向かつて歩みを速め、父は出稼ぎに行き、近所の家々も継続していた家は少なくなつたのではないかと思えます。又、伝統的な色々な事は幼い頃は面白かつたが、学年

が上がるにつれ、それらを非合理的かつ無意味と捉え、「新しい事、近代的な事」こそが良、との価値基準になり、古いものをついつい軽んじる態度になりました。世の中がそうなったのです。世の中の思考も、合理的なことを重んじ金の力が重要視され始めたのが、近代化ということだったでしょう。

しかし、七十三歳を超えた今思うのは、それぞれの行事には生活に関わる一つではない理由があり、眼に見えないものへの畏れや敬い、又先祖を大切に思い祀ることを文化として継承してきた歴史があるという事です。

これは単に昔からの習わしを盲目的に継続して来たのではなく、伝統の根幹に流れている人類の智慧を人々が共有し、それによってムラの形態がうまく治まっていたのであり、それを行う責任を帯びていたのが家長であり、村の長老ということだったのでしよう。

このような行事のおかげで、まだ家長は多少なりとも、長の風格があつたのです。人々が急に忙しくなり、合理的で目に見えるものだけを信じる態度を増長させ出してから、このような家神への畏敬の念や、ひいては目に見えない大いなるものを信じる心は、急に廃れた感があります。

今、昔の様々な行事を思い出し、目に見えない所にこそ貴重な光があり、そこに流れる人間の、慎ましいながら謙虚に自然に感謝する命の流れがあることを自覚しています。このような行事のおかげで、地域社会は協働社会であり、智慧を蓄えた長が必要とされ、民は互いに協力し合って生きていたこと。これを覚えているのは、戦後生まれの七十歳以上の団塊の世代あたりから上の世代になるのでしよう。できるだけ記録しておこうと思います。

（元日本語教師・エッセイスト）

## 追悼 渡辺京二



梶原 宣俊

熊本在住の評論家渡辺京二氏が、二〇二三年十二月二十五日、九十二歳で亡くなられた。

私は新聞とテレビを見て知り驚いた。

実は、私が熊本の学生時代に大変お世話になった方である。

私は、渡辺さんの私塾のアルバイト講師として二年ほど大変お世話になった。渡辺さんは、貧乏学生のために時々、焼きそばを作って食べさせてくれた。

渡辺さんは多忙でゆっくり話せる時間がなく残念であった。それでも、水俣病の集会、デモ等には声をかけてくれて参加したことが

ある。

石牟礼道子さんにもお会いしたことがあるけど、私は恐れ多くて近づけなかった。不思議なオーラが漂う人だった。

渡辺さんとは熊本市内のデモにも参加したことがあるが、渡辺さんが、本気で警察に文句を言っている姿を目前で見、私はすごい人だなと思った。

その後、私は大学紛争の時に休学して東京に出た。渡辺さんから吉本隆明の話聞き、本もかなり読んでいたので、私は吉本隆明さん宅に電話をして、学生時代に書いた一四〇枚の「太宰治論」をもって訪問した。吉本さんは気軽に応対してくれて、「渡辺京二さんは元気ですか」と問われ「お元気です」と答えました。吉本さんは「あの方はとても頭がいい方ですよ」と言われた。

私はまだ渡辺さんの本は読んでいなかった

た。二〇一〇年、ちょうど東京で働いているときに、「黒船前夜」が第三七回大佛次郎賞を受賞され、私は友人ともに参加したことがある。久しぶりの再会であった。

私が渡辺さんの本を読み始めたのは、退職後出水に住みついてからである。「北一輝」や「逝きし世の面影」「なぜ今人類史か」等を読んだが、どれもレベルが高く私には難解であった。一番印象的だったのは、「逝きし世の面影」であった。

江戸末期の日本人、とりわけ庶民が外国人の目によって生き生きと描かれている。当時の庶民が貧しくとも気高く生きている姿が生き生きと描かれている。

一度ご挨拶に行こうと思いついて、ついに行けなかったのが残念である。

あの情熱と鋭い知性が失われ、心からご冥福をお祈りしたい。

春不知火 逝きし面影 京二逝く

(出水喜多会主宰)



日本の伝統芸能文化に魅かれて

— 伝統文化教育について考える —



梶原 宣俊

## 一、はじめに

私が初めて日本の伝統芸能文化に出合ったのは一九九八年、五二才の時である。それまで私は、高校時代に福岡の板付米軍基地の放送を聴きアメリカの文化と音楽に憧れていた。英語が好きで英語クラブに入り英会話を学び英語劇を文化祭で企画実施した。アメリカ留学を夢見ていたが親に反対されてあきらめた。

それから、親への反抗が始まった。家出するように熊本大学に進学した。幸い、国際教

育団体であるYMCAに就職し、英語力は大いに役立った。そして広島の福山YMCAに転勤し、喜多流能楽師大島允信氏に出会い、能謡曲を習い始めた。

## 二、能謡曲との出会い

伝統的な「稽古」が始まった。毎週1回六十分で大島政允先生に一对一で教えていただいた。最初に謡の大まかなストーリーを説明され、早速稽古にはいる。先生が先に謡われて、それをまずじっくり聴き、それから先生について一緒に謡う。音程が違う場合には指摘され、やり直しになる。先生が吹き込まれたカセットテープをもらい自宅でも毎日練習する。とにかく、何回もテープを聴き、曲を覚え、声に出して反復練習する。最初は先生のみねをするだけで精一杯である。いわゆる「型に入る」ことである。次第に下腹に力を入れて、複式呼吸で大きな声を出すことがで

きるようになる。月四回で大体一曲（一冊）が終了する。あとはその繰り返しで、次第に難しい謡曲が増えてくる。家元により、学ぶ段階に応じて謡曲が決められている。

舞台にかかるとは百曲ぐらいである。毎年三回の発表会があり、そのために練習に力が入る。何事も、「人前で発表する」というイベントが上達の秘訣である。紋付袴を着て能舞台での発表だから、最初はとても緊張してうまく声が出なかった。でも次第に慣れてきて、自然に大きな声が出るようになる。そして、謡曲の節・リズム等の全体像が次第にわかってくる。強吟・和吟、大ノリ・小ノリ等の違いがわかってくる。声もしだいに練られてノドが鍛えられる感じである。余裕がでてくると内容や意味を考えるようになる。登場人物の気持ちになって謡えるようになる。

謡曲は、有名な古典文学に基づき、名文は

かりである。日本の伝統的な言語文化がいかに豊かで美しいかを、謡うことによって実感、体得することができる。次第に、能の歴史や古典文学に興味湧き、自発的に勉強し始めた。すると、能・謡曲の奥深さや魅力が見えてきて益々楽しくなる。十四年続けて、漸く喜多流「謡教士」という免状をいただいた。

能は六百年の歴史と伝統をもつ、世界的に高く評価されている芸術的芸能文化であり、謡曲の典拠となっている古典文学は「平家物語」や「古今和歌集」をはじめ百十の文献にのぼる。中国の古典も六十の文献がある。謡曲は「伝統的な言語文化」を楽しく学ぶには、最高の教材であるといえよう。授業法は、CDやテープで聴き、音読から謡へとすすめることが可能である。さらに、どこの地域にも、少数ではあるが謡曲をやっている人はいるはずだから、外部講師として、呼ぶことも可能

である。若手の能楽師もたくさん活躍しており、お弟子さんも全国各地に多少は在住しているのので、協力してもらえるはずである。

### 三、日本の伝統的語り音楽

さらに、私は謡の稽古を契機にして、しだいにそのほかの日本の伝統芸能、特に「語り音楽」に魅せられていった。義太夫、長唄、小唄、端唄、新内節、都都逸、浪曲等のCDやテープを買い集めて、独習した。幸い、五年前に東京で三年間仕事をしている時に、これらの語り音楽の「生」をたつぷり聴くことができた。義太夫・新内節・浪曲はそれぞれ、竹本越考・新内幸照・東家一太郎の教室に三ヶ月通い、稽古した。どれも味わい深い日本の伝統音楽を体感できた。

日本の伝統音楽は「言語文化」が中心であり、日本人がいかに「言語」というものに敏感で、豊かな感性を大切にしてきたかが理解

できるようになった。「伝統的な言語文化」や古典を、とつきやすくするためには、日本の伝統的な「語り(音楽)」を通じて学ばせることに大きな可能性があると思われる。

斉藤孝は平成十五年に、『声に出して読む日本語』を表し評判を呼んだ。斉藤は暗誦・朗誦文化の絶滅の危機感からこの本を書いたと動機を述べ、暗誦文化はこれまでの受験のための暗記教育とは全く異質な文化的営為だと強調している。さらに、『身体感覚を取り戻す』(NHKブックス)のなかで、日本の伝統的な文化の柱として、「腰胆文化」と「息の文化」をあげている。下腹(丹田)に力をいれ、複式呼吸で大きな声を出すということは万国共通の「発声法の基本」であり、伝統的な「型の文化」が強力な教育力を有していることに着目している。取り上げられている古典は馴染みのある、とつきやすいものばかりでテ

キストとしても十分活用できる本である。

(CDもついている)

私は、この暗誦・朗誦文化に加えて、さらに「日本の語り音楽」の学習を推奨したい。伝統的な言語文化は、声に出して、謡うことを通じて、そのリズム・美しさ・魅力をさらに実感することができると思っているからである。その意味では国語と音楽の授業のコーポレーション等が考えられる。

私は次第に、日本の伝統芸能文化の魅力に取りつかれていった。それ以来、能楽の六百年の歴史を学び、百五十曲の謡曲を習い、謡教士の免状をいただいた。そして福山の能舞台や台湾等で発表して来た。さらに、それを契機に、私は日本の伝統芸能とりわけ語り音楽全体に関心を深めていった。

定年退職後、出水市に定住し、出水喜多会を主宰し、出水市文化協会に入会、毎年市民

文化祭で発表してきた。

さらに鹿児島謡曲連合会に入会し、毎年鹿児島の能楽堂で発表してきた。その間十名余の方々には謡曲を教えてきた。また地域の歴史を学び、島津忠兼公や俊寛僧都の謡曲を創作し発表してきた。また昨年からは、文化庁の支援で出水市文化協会主催の伝統文化親子講座で能謡曲の紹介をしてきた。そして、その参加者の中から謡曲を習いたいという方が現れた。なんと中学三年生であった。

私は小躍りして喜んだ。昨年の十二月から月三回の稽古が始まった。これまでは高齢者が多かったのですが、私としても初体験である。将来が楽しみである。

しかし、日本の伝統芸能文化は、現在日本人に幅広く十分定着しているかと言えば必ずしもそうではない。国民全体から言えば、ごく一部の人々が熱心にやっているだけである。

なぜ日本はこんなに素晴らしい伝統芸能文化が存在するのに、一般国民に十分普及していないのだろうか。政府文科省も、本気で普及しようとして動き出したのは、つい最近である。

#### 四、日本の伝統文化教育の歩み

平成十八年の「教育基本法」改正によって、ようやく日本の豊かな伝統文化教育の必要性が強調され、学校教育に取り入れられ始めた。考えてみれば、世界的に観て不思議なことである。自国の歴史や伝統的な言語文化や文化芸能を尊重することはきわめて当たり前のことである。しかしながら、わが国では明治以来の急速な近代化と第二次世界大戦の敗戦により、二度にわたって、伝統文化を否定し、軽視してきた哀しい歴史がある。だからこそ、これからあらためて子供たちの「伝統文化教育」に力を入れていくことが極めて大事であ

ると考える。

#### 五、二度にわたる伝統文化否定

まず、二度にわたるわが国の「伝統文化軽視または否定の歴史」を確認しておきたい。

第一は、言うまでもなく明治維新である。

鎌倉、室町から江戸時代までの日本は、おそらく私達が想像する以上に極めて国際的な開かれた社会であった。四海は世界に通じ、経済文化の交流が盛んであった。江戸時代になって初めて、鎖国政策により日本は世界的に閉じられた社会になったのである。しかしその結果、日本独自の、豊かで多様な文化が花開いた。その多様な伝統芸能文化は、明治維新によって、鎌倉以来六百年以上も続いた武士社会の崩壊とともに、衰退してゆく。日本は欧米の進んだ近代化と軍事力に驚き、欧米に追いつき追い越せと「富国強兵」策に基づき、急速な近代化Ⅱ工業化と、天皇制と軍事

力を強大化させてきた。その結果、学校教育においても、過去の歴史・伝統文化を軽視し、和服や伝統音楽を排除して、洋服や西洋音楽を強制、普及してきた。それでも一般庶民や女性は戦前までは和服を着て、伝統文化や芸能を継承してきた。私の母も小学校時代までは和服を着ていた。この我が国の急速な「近代化」の問題点は文学を始めとしてこれまで様々な議論がなされてきた。英国に留学し悩みぬき、生涯その課題と真剣に取り組んだ夏目漱石はその代表的作家である。

第二は敗戦である。敗戦は、明治以来の天皇制と接合された日本の伝統文化・精神の全面的かつ徹底的な敗北であった。米国・GHQは、その歪められた日本伝統文化・精神を極端に恐れ、徹底した排除をめざした。そして、戦後民主主義体制と学校教育は引き続き、伝統的な言語文化や芸能文化を尊重してこな

かった。戦後になると和服は逆に礼服化してごく少数の人しか着なくなり、洋服が日本社会を支配することになった。この洋服という服飾文化が現代人に与えた精神的影響は私たちの想像以上のものがあるのではなかるうか。なぜなら、和服文化はしつけや礼儀マナーと極めて関係が深いからである。現代人、とりわけ青少年が礼儀マナー、躰を喪失した一因がここにあると筆者は考えている。

戦後はアメリカ文化を積極的に取り入れ、米国の言葉・物・音楽・映画・思考すべてが日本を席捲した。英語やカタカナ文字が氾濫し、欧米文化がかっこいいと多くのひととは考えてきた。私もその一人であった。かくして、欧米崇拜とアジア蔑視、伝統文化軽視は戦後も継承されてきた。それでもごく一部の人々の努力により、伝統文化は細々と継承され、今日まで生き続けてきた。この二度にわたる

伝統文化軽視により、現代社会は、伝統的な言語文化を失い、根無し草のように浮遊し、大人も子どもも日本人としてのアイデンティティや誇り、自信を失い、孤立した社会状況でさまざまな社会問題が噴出してきている。

以上のような時代背景の中で、今回、教育基本法の改正が六十年ぶりに行われ、新たに「伝統や文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養う」ことが教育目標に掲げられたのである。そして、「伝統文化教育実践モデル事業」（国立教育政策研究所）をたちあげ、平成二十年には中央教育審議会が「新学習指導要領」を発表した。その中で、国語科では古典、社会科では歴史、技術家庭科では伝統的生活文化、音楽科では唱歌や和楽器、美術科では日本の美術文化、保健体育科では武道を重視す

るようになってきた。以後、ほそぼそではあるが、小学校中学校の教育課程全体で取り扱われるようになる。

以上述べてきたように、伝統文化教育はもつと早期に実施すべき重要な教育であったはずで、文部科学省の指導如何にかかわらず、各学校が主体的に取り組むべきものである。

「伝統文化教育」は、学力低下や学校の荒廃、学校と現実社会の遊離等の問題解決のためにも、現在先行して普及しつつある「キャリア教育」と同様、学校全体がすべての教科で行うべきであり、さらに地域といっしょになつて取り組むべき課題である。

## 六、日本の語り音楽の歴史と魅力

私は能謡曲を通して、次第に日本の語り音楽の魅力に魅かれていった。しかし、「日本の語り音楽」に焦点をあてた書物はそう多くはない。筆者が調べた中では、団伊玖磨の『私

の『日本音楽史』がわかりやすく、日本の語り音楽の歴史と魅力についての確に論じている。

まず日本が外国の音楽を受け入れた時代を大きく三つに分け、邦楽が「言語文化」を中心に発展してきたことをわかりやすく説明している。

① 仏教とともにアジア大陸の音楽（三韓楽・伎楽・唐楽）の普及時代（7～8世紀飛鳥・奈良・天平時代）。② イエズス会の宣教師によるキリスト教音楽の普及時代（16世紀後半、戦国時代末期）。③ 明治新政府による国是としての西洋文化の普及時代（19世紀後半）の三つである。

もちろん、7世紀以前にも古来から、日本の音楽は存在していたが、それは即興的、自然発生的な音楽で、宗教的な儀式のなかで土鈴や石笛、オカリナのような土笛など演奏していたようである。しかし、組織的に作曲さ

れ演奏されるのは7世紀以降ということになる。7世紀に仏教とともに漢字も導入され、

日本人は文法の違う中国の漢字を表音文字として利用し、平仮名・片仮名を発明し、表意文字としての漢字も組み合わせる自由な表現法を作り上げた。団伊玖磨はここに、日本人の異文化導入の本質的パターンを見出している。つまり、外来の事物はよく受け入れて生活に利用するが、それでいて本体は失わないというパターンである。

ともあれ、日本の音楽の原点は仏教であり、お経であり、声明であったということは、新鮮な驚きであった。「声明」（しようみやう）は、お経をさらに音楽的に謡うものでなかなか味わい深いものである。この「声明」の影響をうけながら、「三韓楽」が発展普及してきた。この時期の三韓楽が現在、「雅楽」として宮中に残っているのでその演奏は今でも聞く

ことができる。最近では東儀秀樹の登場によってかなり知られるようになった。雅楽は日本最初のオーケストラであり、やがてその雅楽から「催馬楽」「朗詠」「今様」などの歌曲（声楽）が生まれたという。団はここに元来、歌好きの日本人を発見している。筆者は「東遊」「催馬楽」「平曲」と聞いてみたが、確かに、「声明」の影響を強く受けていることを納得した。一語一音符主義で「旋律型」の素朴で平坦な歌い方である。

次に②の時期になると、キリスト教（ローマン・カトリック）と鉄砲が伝来する。ここで日本人は歴史上初めて、「西洋」と出合うことになる。日本人が初めて聴いた「西洋音楽」とはミサ曲であり、キリスト教・宗教音楽であった。さらに初めての日本人による合唱もまた「グレゴリオ聖歌」であった。しかし、この宣教師たちが伝えた西洋キリスト教音楽

は、その後の日本音楽にほとんど影響を与えなかった。それは周知のように、徳川幕府による1587年のバテレン追放に始まるキリスト教への徹底した弾圧と禁止であった。そして、1639年には鎖国が完成し、以後250年間は純和風の江戸文化を爛熟させることになる。結果的には、日本独自の音楽を生み出し発展させることができたのである。その音楽は、新しい芸能（猿楽能、歌舞伎、人形浄瑠璃）や、新しい楽器（三味線、琴）や、新しい音楽の場（芝居小屋、遊里、家庭）や、一般庶民という観客の出現により飛躍的に発展していった。

この江戸時代までの日本の音楽の歴史を、団は系統的図にしてわかりやすく整理している。この図は日本の伝統芸能、音楽の体系的な貌を示している。しかも、これを見るときわゆる「声楽」が圧倒的に多いことに気づく。

ここにも日本人の歌好きが現れていると団は言う。日本の声楽は、まず、「はじめに言葉(詩歌・文学)ありき」である。それに節(曲)をつけるという「旋律型」(音程とリズムが固定)で、一語一音符主義であり、いわゆる「語り物」が中心である。そこに今日の西洋的「声楽」とは異質な独自性があると結論づけている。そしてそこに、「自立した西洋音楽(絶対音楽)」とは違う、「言葉や文学に奉仕する日本音楽の本質」を読み取っている。さらに、その違いは、楽器や音階などの違いを超えて、それぞれの感性のあり方や思想・文化の本質に根ざす違いであると指摘している。

西洋音楽は周知のように約1500年前に「楽譜」というものを創り出した。キリスト教の布教のために音楽を重視したからである。一方、アジアの音楽は日本、中国、インドをはじめとして楽譜を持っていなかった。

すべて口承によって伝えられてきたのである。もともと、神と人間をつなぐものとして生まれた音楽が、西洋ではキリスト教という一神教のもとで、自立した「絶対音楽」として発展してきたのに対し、日本では無宗教的雰囲気のみなかで「一点に収束せず」、「愉楽としての音楽」として発展し、神の代わりに「言葉・文学」に付随し内容を補う手段となったと分析している。その背景として、抽象的概念を苦手とし、「具体的なもの」につくという日本人の特性を読み取っている。これは、日本思想の本質を言い得て妙である。これは、音楽という視点からの立派な日本人論、日本文化論になっている。

この日本の語り音楽の授業は、前述の斉藤孝の『声に出して読む日本語』(CD付)を使用することも可能であるし、江戸時代の多様な語り音楽はほとんどCDが存在するので、

教員が多少知識面の勉強をすれば実施可能である。あるいは、地域や外部の専門的人材を呼ぶことも可能である。

## 七、おわりに―学校教育への期待

現在、学校教育は明治以来初めての危機的状況にあり、さまざまな課題を抱えている。また現場の教員は、文科省から出されるさまざまな教育政策に振り回され多忙を極めている。しかし、学校教育のシステム、カリキュラム、教員自身は、つねに新しい子どもたちを見つめながら、より良い教育を模索し、創造していくしかない。

「伝統文化教育」は、その中核として、国語科だけでなく、歴史、社会、音楽、美術、技術家庭、保健体育等を含めて総合的な取り組みが求められるだろう。これまで、文科省

が進めてきた、「総合的学習の時間」や「情報活用力」「PISSA型読解力」「キャリア教育」

「伝統文化教育」等を、それぞれ個別に実施するのではなく、それぞれの学校教育の理念として体系化し、カリキュラム化し、総合的に実施することが必要であろう。

「伝統文化教育」の導入方法としては、実践モデルとして有名な東広島市の事例が参考になる。東広島市では、市の教育目標として「地域・文化を知り、誇りを持ち、語れる子ども」を育成することを掲げ、幼稚園、小学校52校で「和文化教育」を実践してきた。領域を、生活文化・地域文化・伝統文化・現代文化の四つにわけ、「二校一和文化学習」をめぐらし、地域全体で取り組んできた。教員全体が関わり、地域と連携して地域文化創造に取り組み成果をあげてきた。

この行政・地域・学校が一体となって「和文化教育」を推進するという方法は「キャリア教育」等でも同様に大事で、今後の学校教

育改革のあり方に大きな示唆を与えている。

最後に、この行政・地域・学校が一体となつてすすめるためには、地域にその連携を促進し、コーディネートするNPO団体のような存在が必要となるだろう。

たとえば、二〇〇一年に設立された愛知県  
のNPO法人アスクネットは、地域と学校を  
結ぶ教育コーディネーターの組織で、キャリ  
ア教育を中心に伝統文化を含む幅広い市民講  
師の派遣や授業プログラムの提案・支援等の  
活動を行っている。今後、このようなNPO  
が全国各地にできるようになれば「伝統文化  
教育」もよりスムーズに推進することが可能  
である。いずれにしても、時代は大きく変化  
し、「伝統文化教育」の継承と教育の必要性は  
今後ますます高まるだろう。すでに全国各地  
で、さまざまな先進的実践が行われているの  
で、それらを参考にしながら、独自の教材と

授業内容・方法を創造し、子どもたちが日本  
の自然と風土と言語、歴史を愛し、誇りをも  
つて国際社会を生きてゆけるよう、学校教育  
に大いに期待したい。私もまた、ささやかな  
がら実践と研究を続けていきたいと考えてい  
る。

蛇足ながら、これを書き終えたころ、白男  
川さんの紹介で、出水市中央図書館講座で毎  
週土曜日、一年間「伝統芸能文化入門講座」  
をやることになった。関心のある方は、ぜひ  
参加していただきたいと願っている。

(出水喜多会主宰)

### 【参考文献】

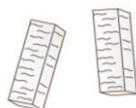
- ・阿寒平太「明治維新という宗教革命にお  
ける伝統文化、民俗芸能の喪失」蔦ニュース  
(インターネット)第42号 平成17年
- ・阿寒平太「明治維新における伝統文化・

- 芸能の衰退と学校教育制度」 蔦ニュース（インターネット） 第43号 平成17年
- ・杉本厚夫他『教育の3C時代—イギリスに学ぶ教養・キャリア・シテイズンシップ教育』世界思想社 平成20年
  - ・東京都教育委員会「日本の伝統・文化理解教育の進捗状況」教育庁報N0534
  - ・杉本昌裕「都立高校における日本の伝統文化カリキュラムについて」NIIエレクトリックライブラリー 平成17年（インターネット）
  - ・中村哲編『伝統や文化に関する教育の充実—その方策と実践事例』教育開発研究所 平成21年
  - ・梶田叡一監修『学校を活性化する伝統・文化の教育』学事出版 平成21年
  - ・門脇達祐『改版謡曲基歌集』自家版 平成14年
- ・星川京児・田中隆文『邦楽ディスク・ガイド』（CD情報満載）音楽之友社 平成12年
- ・団伊玖磨『私の日本音楽史』NHKライブラリー 平成11年
  - ・徳丸吉彦・利光 功『芸術文化政策』放送大学教育振興会 平成14年
  - ・折口信夫『日本芸能史六講』後藤 淑『改訂日本芸能史入門』社会思想社 平成8年
  - ・斉藤孝『声に出して読む日本語』草思社 平成15年
  - ・『大衆芸能資料集成』一巻く六巻（祝福芸から寄席芸、落語・講談・浪曲等が収められた貴重な資料）三二書房 昭和55年から



## 島津寒天工場跡

— 歴史を訪ねる旅 (17) —



### 下土橋 渡

生まれ育った土地やそこからそう遠くない所のことなのに、それなりの歳になるまで知らずにいた歴史や文化、史跡が結構あるのをたびたび実感したものである。『島津寒天工場跡』もその一つであった。

著者が住む隣の鹿児島薩摩川内市東郷町には、約300年の歴史を持つ東郷文弥節人形浄瑠璃が伝承されていて、定期公演を楽しみることができる。その関連で、やはり同じ文弥節人形浄瑠璃が伝承されている宮崎県都城市山之口町（藩政時代は薩摩藩直轄地であった）にある『山之口麓文弥節人形浄瑠璃

資料館』（人形の館）を訪ねたのが2011年12月のことだった。

そのとき、その資料館の近くで『島津寒天工場跡』への道標の看板を見かけたのである。

時間の都合で、後日訪ねることにしたのであるが、帰宅してインターネットで調べると、なんと窯の跡が当時のまま残されているというのでびっくりした。歴史・史跡を訪ねて歩けば、歴史・史跡に遭遇するという感じの『島津寒天工場跡』との出会いであった。

### 一、寒天について

ゼリーやみつまめ、水ようかん、フルーツポンチなどに用いられる寒天は、食物繊維を豊富に含むことNO1といわれる食品で、食べれば腹持ちがいい、ほぼノンカロリーで無制限に食べられる、ほとんど無味無臭なのでサラダや肉料理、味噌汁などいろいろな食べ方が楽しめる、といった特長があり、今日、

健康食品、ダイエット食品としても注目されている。

「寒天」は、テングサ（天草）やオゴノリなどの海藻類を煮溶かし、冷して固めた、いわゆるトコロテンを、さらに凍結・脱水し、乾燥させてつくる。トコロテンは、奈良時代に中国から伝わったが、寒天は日本のオリジナル食品である。

江戸時代初期の1685年（貞享2年）、京都伏見の旅館『美濃屋』の主人・美濃太郎左衛門は、客にトコロテンを饗応し、残りを戸外に放置していたところ、一夜で凍結し、翌日見かけた時には日光で溶けかかっていた。太郎左衛門はこれにヒントを得てトコロテンの干物を作ると、持ち運びも便利で、前よりも美しく、海藻臭さが無いと評判になった。これが、寒天の起こりである。

天保年間（1980～1843年）になる

と、信州の行商人・小林糸左衛門が諏訪地方の農家の副業として寒天作りを広め、角寒天（寒天を角張った形状にしたもの、棒寒天ともいう）として定着した。現在でも、12月中旬から翌年2月下旬頃にかけて、長野県茅野市で天然角寒天の製造が行われており、諏訪地方の冬の風物詩の一つになっている。

## 二、調所広郷と薩摩藩の財政改革

幕末、薩摩藩は1809年（文化6年）に島津斉興が第10代藩主になった頃、財政の窮乏はその極みに達し、500万両という膨大な借金をかかえるに至った。この難局打開のための財政再建に着任したのが調所広郷（1770～1849年）であった。調所は、家老に就任後たった2年で藩財政を500万両の借金から250万両の蓄えが出来るまでに回復させた。

調所の再建策は、琉球を通じた清との密貿易

易、専売制による大島・徳之島の砂糖の強引な取立て、証文を燃やしたり商人を脅したりしての借金の踏み倒しといったものであったといわれるが、物産の開発、産業の振興といった近代的で合理的な事業も多くあった。その一つが、これから述べる寒天工場の経営であった。

### 三、島津寒天工場

島津寒天工場は、高城郷（現都城市高城町）石山と山之口郷（現都城市山之口町）永野の二か所に設けられ、明治初め頃まで操業が行われていた。高城郷石山の窯跡は滅失してしまっていたが、山之口郷永野の寒天工場跡については、竹藪に埋もれていた窯跡の発掘作業が行われた。2005年（平成17年）に発行の山之口町史につきのようにある。

幕末のころ、島津藩の財政困窮はその極み

に達していた。時の家老・調所笑左衛門広郷は、指宿の豪商・浜崎太平次と諮り、財政再建策としてこの地に寒天製造工場を設けた。最盛期は、三世太平次が支配人に任ぜられた安政元年（1854年）から明治4年（1871年）ごろまでであったと思われる。この僻遠の地、永野を選んだのは、寒天製造に適した自然条件を備えていたとともに、島津家狩倉でもあり、取り締まりの厳しい幕府役人の目を避けるためでもあったと思われる。

原料のテングサは、甌島を中心に、薩摩西海岸から運ばれ、製品は馬で福山港に運び、さらに大阪・長崎に運んで、中国・ロシア等に密輸していた。また、監督者・技術者等は、鹿児島から派遣され、西目地方（指宿・伊集院・伊作等）からの出稼ぎ者80人くらいと、地元採用者50人くらいを合わせた従業員数約120～130人であったといわれている。



島津寒天工場跡の場所

昭和56年(1981年)8月からの発掘作業により、現在では9基の窯跡をみる事ができる。窯径130センチ、高さ180センチ。



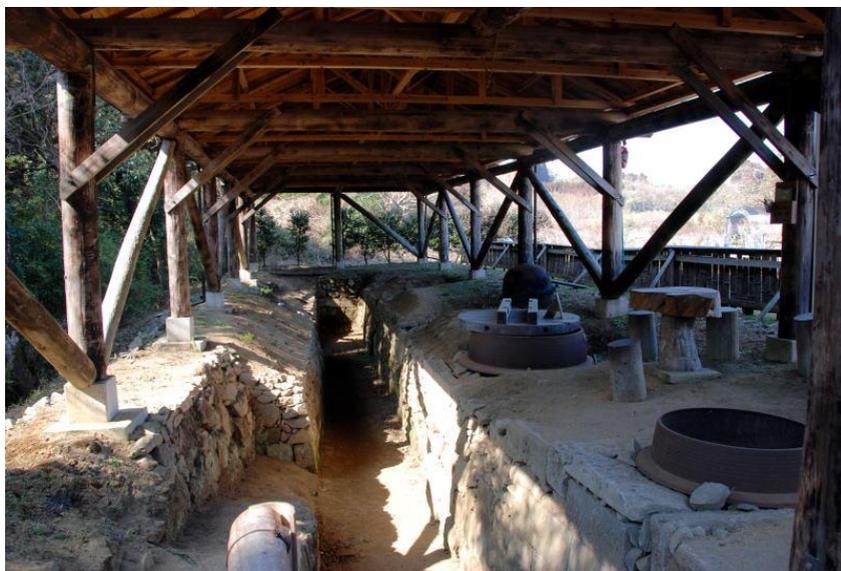
鹿倉と番所に囲まれた島津寒天工場



山之口郷永野の島津寒天工場跡全景（元々は茅葺だった）



島津寒天工場跡の説明板



島津寒天工場の復元された窯



テングサを煮る大釜

#### 四、寒天工場経営の斬新な着想

寒天が長野県諏訪地方のように寒気の酷しい中部高原地帯でつくられていた一世紀半の昔、薩摩藩が暖かい南国で寒天をつくり、清国やロシアに密輸しているなど、幕府は考へもしなかったことであろう。

南国は寒天をつくる自然条件には恵まれていないという固定概念をはねのけ、薩摩藩は、冬寒さが酷しく、北西の風が吹きすさぶ、しかし日中は陽光が輝き、水質もいい、そんな適地を藩直轄地である高城郷、山之口郷に見つけ、寒天づくりを移行したのである。

このことを、『薩摩藩の寒天工場経営とその遺跡の保存顕彰について』(宮崎県地方史研究紀要第20輯)の著者である塩水流忠夫氏は、薩摩藩再建への気概ともいうべきであろうかと述べ、寒天工場経営の斬新な着想について以下のことを指摘している。

#### (一) 寒天の密造に格好の地

中世から近世の日本において武家が狩猟や騎射の場として管理した山野のことを狩倉という。山之口郷永野の寒天工場は、当時薩摩藩がその立ち入りを厳しく取り締っていた3つの狩倉に囲まれていた。

すなわち、寒天工場は、東方の山之口狩倉、北方の批把狩倉、南方の里場狩倉に囲まれ、その間を有水川が流れる山あいの地に設けられていた。しかも、有水川が流れ出る北西の方は開けていて、冬北西の季節風がこの工場の乾燥場に吹き込んだ。また北西にある山は、冬の日暮れを早くし、それだけ夜の気温を下げるのに役立った。

当時の薩摩街道・東目筋は、鹿児島城下から都城に至り、ここから二つに分かれた。一つは、高城郷を経て去川の関所を通り、高岡郷に出るいわゆる薩摩街道であり、もう一つ

は、山之口を通り、青井岳を越えて飢肥藩田野に出る鹿児島街道ともいわれていた道であった。

領外へ通ずるこの2つの街道には、境目番所や辺路番所が置かれ、厳しい取り締まりが行われていた。それは、禁制の一向宗に対する警戒とともに、藩の専売や密造に対する厳戒態勢のための対策であった。また、山之口麓から寒天工場のある永野に通ずる道路については、通道掟が定められて通行が厳しく取り締まられた。

このように、寒天工場の地は寒天製造に適した自然環境を備えていたばかりでなく、他国者を寄せ付けない厳重な警戒網の中に造られていたのである。

## (2) 薪をとるのに便利な地

テングサをたく釜は大きな釜で、山之口郷永野の寒天工場だけでも36個の窯があった

といわれるから、これに要した薪は膨大な量であったと考えられる。

しかし、この地は、膨大な量の薪を集めるにも格好の地であった。寒天工場の目前に藩の狩倉山が連なっていたからである。立入禁止の狩倉山に藩の許可をもらった地元の百姓たちが薪を取りに行つたに違いない。地元の百姓にとつて、農閑期の有難い仕事であったと思われる。

## (3) 出稼ぎの受入れと山間地の活性化

薩摩藩を薩摩半島と大隅半島の2つの地域に分けて、前者を西目、後者を東目とも呼んだ。

寒天づくりに直接たずさわった従業員は、高城郷石山と山之口郷永野の両方の工場で合わせて300名ほどだったといわれる。その中の160〜180名は西目地方の指宿・伊集院。伊作等からの出稼ぎ者であった。当時

の西目地方は耕地が狭く生産性が低く、領民の暮らしは貧困であった。農閑期の1600〜1800名の出稼ぎの受入れは、西目地方の口減らしにも役立った理にかなったやり方であったと考えられる。

甌島を中心にしたテングサ取りにも女子を主として多くの人々が従事した。これも西目地方の活性化に役立ったと思われる。

一方、地元では、寒天草選びを中心とした仕事に女子が雇用された。その人数は両工場に130名ぐらいだったと推測されている。これも農閑期の仕事で、東目地方の山間地の活性化に役立ったと思われる。

#### (4) 上納米の搬出とテングサの搬入

高城・山之口・三股等からなる三俣院一千町歩は薩摩藩のドル箱的穀倉地帯であった。慶長19年(1614年)都城領主北郷忠能がこの地を宗藩に返上して以後、この地で産

した米は、上納米として福山に運ばれ、船で鹿児島や上方方面へ搬出された。

冬季の米の搬出と期を同じくして寒天づくりが始まる。福山に米を運ぶ馬方は、そう重くない寒天も一緒に馬の背に乗せて運ぶに違いない。帰りはテングサや福山特産の酔を馬の背にして帰る。まことに合理的なやり方であったと思われる。

#### 五、おわりに

山之口郷、高城郷における島津寒天工場は、南国薩摩で寒天づくりという、一般の意表をつく着想に驚かされ、幕府の目を盗んで経営されたということに驚かされて興味深い。

寒天が薩摩藩の財政再建に果たした役割は、砂糖専売等に比べれば微々たるものであったに違いない。しかし、砂糖専売等が琉球や奄美等の農民を苦しめたのに対して、寒天

工場の経営は、西目地方や庄内地方の活性化、  
 甌島や福山の産業振興にも役立ち、多くの  
 人々を喜ばせたに違いない。この点も興味深  
 い。  
 （元九州職業能力開発大学校教授）

### ―補遺―

京都伏見の旅館『美濃屋』の主人・美濃太  
 郎左衛門が、客にトコロテンを饗応し、残り  
 を戸外に放置したというエピソードの客が、  
 実は、参勤交代の途次に投宿した薩摩藩主島  
 津公（何代かは不詳）だったそうであるから、  
 薩摩藩と寒天の因縁が感じられておもしろい。  
 日本で発明された寒天は、1881年（明  
 治14年）、ロベルト・コッホが寒天培地によ  
 る細菌培養法を開発すると、国際的需要が増  
 える。このため、第二次大戦前寒天は日本の  
 重要な輸出品だったが、第二次世界大戦中は、  
 戦略的意味合いから輸出が禁止された。

寒天の供給を絶たれた諸外国は自力によ  
 る寒天製造を試み、自然に頼らない工業的な  
 寒天製造法が開発された。こうして作られる  
 ようになったのが粉末寒天で、日本でも19  
 70年（昭和45年）頃には製造会社が35  
 社にまで達した。しかし、2004年（平成  
 16年）には5社ほどに激減。諸外国では、  
 モロッコ、ポルトガル、スペイン、チリやア  
 ルゼンチンで寒天が製造されている。

### 【参考にしたサイト及び図書】

- (1) 寒天―ウイキペディア
- (2) 山之口町史（2005年発行）
- (3) 塩水流忠夫『宮崎県地方史研究紀要第  
 二十輯』く薩摩藩の寒天工場経営とそ  
 の遺跡の保存顕彰について

## 固心院いくさ墓

### ― 入来麓史跡探訪 (1) ―

入来麓武家屋敷群の中心部から直線距離にして六〇七メートル南南西のところにあります。生前に死後の七七忌までの供養をなすことを逆修または予修といいます。

ここにある多数の石塔はその大部分が戦国時代の入来院武士が出陣前に自分の予修塔として造立しもので、昔から「いくさ墓」と通称されてきました。

塔型は宝塔、宝篋印塔などが多く、領主塔も七つほど確認されています。この地に固心院の前身であった宗栄寺が創建されたのは十六世紀中葉の頃だと推定されます。

春時雨ざわめきを聞くいくさ墓 渡



固心院いくさ墓 (薩摩川内市指定文化財)

## 編集後記・・・

■刷り上がった「炉ばたセイ談」の冊子を新大同印刷の方が入来まで運んでくださったのは毎年9月の父の誕生日頃ですが、今年は色々あって少し遅れてしまいました。紙もインク代も毎年驚くほど高騰しているようですが、今年はなんとか消費税込みの250円でお願いでできてほっとしています。■とにかく、亡き母が残したと言っても過言ではないこの冊子をなんとか毎年続けて発刊したいという想いで皆さまに原稿をお願いしていますが、皆さま素晴らしい原稿をお寄せくださり感謝します。特に、十五代沈壽官さんも超のつく過密スケジュールの中、原稿をいただけて心からありがたかったですし、今年知り合ったばかりの海上保安庁の奥村太氏と東京の弁護士でいらっしゃる溝口敬人様からも快く寄稿していただけて感謝の気持ちでいっぱいです。どうかこれからも入来麓から発信する「炉ばたセイ談」をよろしく願います。(入来院久子)

■今年も貴重な随筆・論文をたくさんお寄せ頂き嬉しい限りであります。ありがとうございます。

心より感謝申し上げます。出来るだけ多くの方々に読んでもらいたいという思いに駆られる冊子になりました。冊子が出来上がりましたら、早速鹿児島県立図書館に持ち込んで、所蔵してもらい、郷土資料コーナーの閲覧室に置かせてもらいたいと思っています。■入来武家屋敷群の一角から発信されるこの冊子に「入来麓の歴史のにおい」をと思い、毎年一ヶ所ずつ入来麓の史跡を紹介するシリーズ『入来麓史跡探訪』を始めました。初回として、1ページではありますが、本誌で『固心院いんぐら』を取り上げました。(下土橋渡)

### 「炉ばたセイ談」 第19号

炉ばたセイ談会会長 中西喜彦

編集担当 下土橋渡・入来院久子

事務局 T895-11402

薩摩川内市入来町浦之名130

入来院重朝方

TEL・FAX 0996-44-3586

印刷 新大同印刷株 (0996-30-1181)



令和5年秋

第19号

〒895-1402

薩摩川内市入来町浦之名 130

炉ばたセイ談事務局